

# 鞠智城跡

—第32次調査報告—

2011

熊本県立裝飾古墳館分館  
歴史公園鞠智城・温故創生館

# 鞠智城跡

—第32次調査報告—

2011

熊本県立装飾古墳館分館  
歴史公園鞠智城・温故創生館

## 序 文

鞠智城跡は、7世紀後半に西日本各地に築かれた古代山城の一つです。熊本県教育委員会では、昭和42年度に鞠智城跡の発掘調査を開始し、これまで32次にわたる調査を実施してきました。

これまでの調査では、八角形建物跡をはじめとする72棟の建物跡や3ヶ所の城門跡、そして貯水池跡や土壘等の重要な遺構が確認されました。また、土器や瓦のほか、百濟系菩薩立像や木簡などの貴重な遺物も出土し、鞠智城が古代史上で果たした役割が明らかとなっています。

平成22年度は、平成16・17年度に実施した第26・27次調査の再調査として、池ノ尾門跡の発掘調査を実施しました。その結果、石壠の石積みなどの新たな遺構が確認され、鞠智城の城門構造を解明する上で重要な成果がありました。

今回の発掘調査の成果をまとめた本報告書が、学術的資料としてのみならず、県民の皆様の埋蔵文化財及び史跡の保護に対する認識と理解を深めていただくための一助となれば幸いです。

最後に、調査の実施にあたりご理解とご協力を頂いた関係諸機関、調査に対するご指導・ご助言をいただいた諸先生方、並びに地元の方々に対し深く感謝申し上げます。

平成23年12月28日

熊本県教育長 山本隆生

## 例 言

- 1 本書は、熊本県教育委員会が平成22年度に文化庁国庫補助事業として実施した鞠智城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館が実施した。
- 3 発掘調査を実施した地点は、行政区画上、熊本県山鹿市菊鹿町木野2008、2009番地に該当する。
- 4 発掘調査は平成22年7月13日から平成23年3月30日まで実施し、矢野裕介、能登原孝道、木村龍生、前川真由美が担当した。
- 5 発掘調査現場における遺構実測、遺物の取り上げ、写真撮影は基本的に調査担当者が行い、一部の遺構平面図作成業務は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
- 6 遺構図のデジタルトレース業務は、株式会社九州文化財研究所に委託した。
- 7 遺物の実測・トレース・拓本は能登原、内野未稀、大森よう子、菊川直美が行った。
- 8 遺物写真撮影は能登原、木村が行った。
- 9 本遺跡の遺物及び写真、図面などの資料は、すべて熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館にて保管している。
- 10 本書の執筆・編集は、熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館で行い、能登原が担当した。

## 凡 例

- 1 平面直角座標は、日本測地系を使用している。方位は、座標軸を基準とした座標北を示している。
- 2 本書に使用したレベル（L=）は標高を示す。
- 3 本書に掲載している遺構図は、それぞれ任意の縮尺で掲載している。挿図中のスケールを参照されたい。
- 4 本書に掲載している遺物は、土器を1/3、瓦を1/4の縮尺で掲載している。なお、須恵器の実測図断面は黒塗りしている。
- 5 各層位の土色及び土器の土色は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修）による。

## 「鞠智城跡－第32次調査報告－」 目次

序文

例言

凡例

第1章 調査の概要	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査及び整理の組織	1
第3節 調査の過程	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と成果	7
第1節 調査の方法	7
I. 発掘調査	7
II. 整理作業	7
第2節 組序	10
第3節 調査の成果	13
I. 遺構	13
①石壙	13
②導水溝	17
③通水溝	19
④門礎石	21
II. 遺物	22
①遺物の出土状況	22
②出土遺物	23
第4章 総括	27

写真図版

報告書抄録

奥付

## 挿図目次

- |      |                   |      |                 |
|------|-------------------|------|-----------------|
| 第1図  | 鞠智城跡の位置           | 第11図 | 導水溝見通し断面図       |
| 第2図  | 鞠智城跡周辺主要遺跡分布図     | 第12図 | 導水溝側壁石材分布図      |
| 第3図  | 鞠智城跡全体図           | 第13図 | 盛土状造構土層断面図      |
| 第4図  | 池ノ尾門跡周辺地形測量図      | 第14図 | 通水溝・石壙背面断面図     |
| 第5図  | 東壁・ベルト2・ベルト3土層断面図 | 第15図 | 通水溝底部断面図        |
| 第6図  | 南壁・ベルト1土層断面図      | 第16図 | 池ノ尾門跡門礎石        |
| 第7図  | 池ノ尾門跡調査区平面図       | 第17図 | 池ノ尾門跡出土遺物実測図(1) |
| 第8図  | 池ノ尾門跡調査区石材分布図     | 第18図 | 池ノ尾門跡出土遺物実測図(2) |
| 第9図  | 石壙背面石積み           | 第19図 | 池ノ尾門跡出土遺物実測図(3) |
| 第10図 | 石壙背面石積み石材分布図      | 第20図 | 池ノ尾門跡出土遺物実測図(4) |

## 表目次

第1表 遺物観察表(土器)

第2表 遺物観察表(瓦)

## 図版目次

- |     |  |      |  |
|-----|--|------|--|
| 図版1 | 上：池ノ尾門跡遠景<br>下：池ノ尾門跡調査区全景                        | 図版10 | 上：取水口南側粘土被覆部須恵器<br>中：池状落ち込み造構・盛土状造構<br>下：盛土状造構内石列検出状況1 |
| 図版2 | 上：石壙背面石積み<br>下：池状落ち込み造構水成粘土堆積状況                  | 図版11 | 上：盛土状造構内石列検出状況2<br>中：盛土状造構内丸瓦出土状況<br>下：導水溝・通水溝         |
| 図版3 | 上：導水溝・取水口・通水溝<br>下：取水口内部土師器坏出土状況                 | 図版12 | 上：通水溝取水口<br>中：通水溝底部検出状況<br>下：通水溝排水口推定部                 |
| 図版4 | 上：盛土状造構土層断面<br>下：池ノ尾門跡門礎石                        | 図版13 | 上：通水溝側壁状況<br>中：通水溝周辺平瓦出土状況<br>下：調査区北西部状況               |
| 図版5 | 上：東壁土層断面<br>中：南壁土層断面<br>下：ベルト1土層断面               | 図版14 | 上：調査区全景<br>中：発掘調査作業<br>下：埋め戻し作業                        |
| 図版6 | 上：ベルト2土層断面<br>中：ベルト3土層断面<br>下：石壙背面石積み            | 図版15 | 上：池ノ尾門跡出土土師器坏<br>下：池ノ尾門跡出土土師器                          |
| 図版7 | 上：石壙背面石積み前面土層断面<br>中：石壙前面基底石列<br>下：石壙背面基底石列      | 図版16 | 上：池ノ尾門跡出土須恵器・外面<br>下：池ノ尾門跡出土須恵器・内面                     |
| 図版8 | 上：石壙部<br>中：導水溝1<br>下：導水溝2                        | 図版17 | 上：池ノ尾門跡出土瓦・凸面<br>下：池ノ尾門跡出土瓦・凹面                         |
| 図版9 | 上：導水溝北側壁<br>中：導水溝南側壁<br>下：取水口南側粘土被覆部須恵器<br>出土状況1 |      |  |

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査にいたる経緯

鞠智城跡は熊本県の北部、山鹿市菊鹿町南部から菊池市北西部にかけて所在する古代山城である。「続日本紀」文武天皇2（西暦698）年5月の条にみえる「令大宰府縉治大野・基肄・鞠智三城」という修繕記事を初見とし、「日本文德天皇実録」天安2（西暦858）年2月、6月の条、「日本三大実録」元慶3（西暦879）年3月の条にも城名の記載がみられる、いわゆる「朝鮮式山城」である。現在は、熊本県が平成6年度から始めた保存整備事業により、八角形鼓楼、米倉、兵舎、板倉が復元され、平成14年度にはガイダンス施設「温故創生館」が開館し、歴史公園として広く県民に親しまれている。また、平成16年2月27日には、国の史跡に指定された。

この鞠智城跡の本格的な発掘調査は、熊本県教育委員会が昭和42～44年度に実施した第1～4次調査に始まる。これは当時、熊本女子大学教授であった乙益重隆を調査団長とする「鞠智城調査团」によるものであった。その後、昭和62年度の第10次調査からは、文化庁国庫補助事業として毎年度継続的に調査を実施してきた。その結果、国内の古代山城では例をみない八角形建物跡をはじめとする72棟の建物跡や、5,300m<sup>2</sup>という広大な面積をもつ貯水池跡、版築盛土による土塁、そして通水溝を伴う石墨など城の構造解明に伴う貴重なデータが蓄積されてきた。また、平成20年度には貯水池跡池尻部から百濟系の銅造菩薩立像が出土するという大きな成果があった。

現在の発掘調査は、貯水池跡、城門跡、土塁線の構造解明を目的とする調査方針と、それに基づく平成23年度までの年次計画を掲げた『第2次鞠智城跡保存整備基本計画』（平成14年3月策定）に基づき実施している。第32次調査においても本計画に基づき、池ノ尾門跡の構造把握を目的とする本調査を計画し、平成21年度に鞠智城跡保存整備検討委員会の審議・了承を得て実施することになった。

### 第2節 調査及び整理の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属等は当時のもの）。

#### 発掘調査（平成22年度）

調査主体者 熊本県教育委員会

調査責任者 大田幸博（熊本県立装飾古墳館長）

調査範囲 大塚敏彦（同副館長兼歴史公園鞠智城・温故創生館長）

調査事務局 河北公児（同文化財整備交流課長）、稼農久芳（同参事）

調査担当 能登原孝道（同学芸員、主査）、矢野裕介（同参事）、木村龍生（同主任学芸員）、前川

真由美（嘱託職員）

#### 整理・報告書作成（平成23年度）

整理主体者 熊本県教育委員会

整理責任者 木崎康弘（熊本県立装飾古墳館長）

整理範囲 大塚敏彦（同副館長兼歴史公園鞠智城・温故創生館長）

整理事務局 河北公児（同文化財整備交流課長）、稼農久芳（同参事）

整理担当 能登原孝道（同学芸員、主査）、矢野裕介（同参事）、木村龍生（同主任学芸員）、内野

未稀（嘱託職員）

#### 鞠智城跡保存整備検討委員会（平成22・23年度、50音順・敬称略）

板楠和子（九州ルーテル学院大学教授）、今村克彦（熊本県文化財保護審議会委員）、岡田茂弘（国立歴

史民俗博物館名譽教授)、小田富士雄(福岡大学名譽教授)、河原純之(元千葉大学教授 平成22年度まで)、小西龍三郎(元九州造形短期大学教授)、坂上康俊(九州大学大学院教授)、佐藤信(東京大学大学院教授 平成23年度から)、田中哲雄(元東北芸術工科大学教授 平成23年度から)

**調査指導及び協力者 (50音順・敬称略)**

網田龍生(熊本市観光文化交流局)、岩永省三(九州大学総合研究博物館教授)、小田富士雄(福岡大学名譽教授)、亀田修一(岡山理科大学教授)、佐藤信(東京大学大学院教授)、西谷正(九州大学名譽教授)、林重徳(佐賀大学名譽教授・客員研究員)、山鹿市菊鹿町米原地区、菊池市木野堀切地区

**発掘調査作業員 (50音順・敬称略)**

河津祐太郎、坂本孝雄、田中幸一郎、出口陽章、富田アツ子、中原ミエ子、原田タカエ、前田博之、宮本定、村上多喜子、森絹代、矢野光子、米岡重美、米岡敏隆、米岡文江

**整理作業員 (50音順・敬称略)**

大森よう子、菊川直美、原ケイ子、福島秀子

### 第3節 調査の過程

発掘調査は、平成22年7月13日(火)から平成23年3月30日(水)まで実施した。

**【平成22年7月】**

13日、調査を開始。調査区及びその周辺の除草作業等の環境整備を実施する。16日、除草作業等を完了する。本日で一旦作業を終了する。

**【平成22年8月】**

17日、作業を再開する。26・27次調査で確認した遺構の清掃・確認作業を実施。24日、清掃・確認作業が完了し、調査前の全景写真を撮影。26日、導水溝周辺部の構造を確認するため導水溝南側周辺部の掘削を開始。31日、平成22年度第1回鞠智城跡保存整備検討委員会が開催され、委員の先生方から指導・助言を受ける。

**【平成22年9月】**

1日、県文化課より能登原が調査担当として鞠智城・温故創生館に配属される。7日、プレハブ等を設置。10日、任用の都合上、本日で作業員による作業を一旦終了する。28日、作業を再開する。調査区東壁の土層の確認を行う。29日、導水溝南側周辺部において、水成粘土層(東壁30層)の直上の褐色粘質土層(東壁27層)を掘り下げ中、須恵器壺の破片と土師器片が出土。また、調査区清掃中に、取水口南側から須恵器の壊蓋が出土。

**【平成22年10月】**

5日、調査区東壁の土層断面図の作成を開始。6日、導水溝南側周辺部において褐色粘質土層をほぼ掘り終える。この褐色粘質土層より下層は東側に向けて徐々に下がっていく状況が確認できた。7日、導水溝南側周辺部の東側において水成粘土層中から多くの軽石の礫を検出した。また、西側の土層断面を確認したところ、褐灰色粘質土とぶい黄橙色砂質土が交互に堆積している状況が確認できるとともに、東側で確認された水成粘土層が西側では確認されないことが分かった。8日、東側の水成粘土層の上面まで掘削が完了。13日、導水溝より西側の調査区の清掃を開始。14日、導水溝南側の水成粘土層の掘削を開始。19日、水成粘土層の掘削が完了。

**【平成22年11月】**

2日、調査区南壁、及びベルト1の土層断面図の作成を開始。4日、調査区横で展示公開している池ノ尾門礫石の実測を開始。17日、取水口等の清掃を行う。18日、取水口等の写真撮影を実施。25日、委託する造

構実測作業について、埋蔵文化財サポートシステム熊本支店の担当者と打ち合わせを行う。26日、導水溝南側周辺部の南東隅に残しておいた階段部を撤去中、褐色粘質土層（東壁27層）から須恵器壺の口縁部片が出土。任用の都合上、本日で作業員による作業を一旦終了する。

#### 【平成22年12月】

10日、ベルト2の土層断面図の作成を開始。14日、埋蔵文化財サポートシステム熊本支店による実測作業が開始される。16日、通水溝の排水口の推定箇所において掘り下げを開始。石材を多数検出したが、原位置を保つような石材は確認できなかった。21日、平成22年の発掘作業を終了する。

#### 【平成23年1月】

5日、年明けの作業を開始。正月休み中に溜まった水の排水などを実施。18日、埋蔵文化財サポートシステム熊本支店による実測作業が完了。20日、実測が終了していない調査区北西部の実測を開始。菊池市教育委員会阿南氏が来訪。佐藤信東京大学大学院教授が来訪され、指導・助言を受ける。

#### 【平成23年2月】

8日、①通水溝の排水口推定箇所、②通水溝の蓋石が動いている箇所、③石壙背面基底石列の南西側延長部の3箇所にトレントを設定し、掘り下げを開始する。10日、岩永省三九州大学総合研究博物館教授による現地指導を受ける。15日、平成22年度第2回鞠智城跡保存整備検査委員会開催が開催され、委員の先生方から指導・助言を受ける。18日、石壙背面基底石列の南西側延長部に設定したトレントにおいて、石材が3石ほど並んでいる状況を確認し、これが石壙背面を構成する石材となる可能性がでてくる。また、通水溝の蓋石が動いている箇所において、原位置を動いている石を、番号をふった上で除去する作業を開始した。19日、調査区北西部の実測が完了。21日、石壙背面基底石列の南西側延長部のトレントにおいて掘り下げを行った結果、4～6段の石積みを確認。また、通水溝の排水口推定箇所の掘り下げを継続するが、搅乱がひどく明確な遺構は確認できなかった。22日、小田富士雄福岡大学名誉教授による現地指導を受ける。新たに確認された石積みをはじめとする遺構の解釈及び調査方法について指導を受けた。23日、西谷正九州大学名誉教授、林重徳佐賀大学名誉教授による現地指導を受ける。通水溝排水口推定部の現況の実測を開始する。24日、通水溝取水口の撮影のため取水口内部を清掃していたところ、完形に近い土師器の壺が出土。鞠智城説明ボランティア会の池ノ尾門跡調査見学会が行われた。25日、石壙背面の石積み、及び取水口内出土の土師器出土状況等の撮影を行う。亀田修一岡山理科大学教授による現地指導を受ける。

#### 【平成23年3月】

4日、ローリングタワーを組み、通水溝などの遺構の写真撮影を行った。プレハブが撤去される。任用の都合上、本日で作業員による作業を一旦終了する。8日、石壙背面の石積みの実測を開始。11日、石壙背面の石積みの実測が完了。導水溝、取水口部の見通し断面図などの作成を開始。15日、坂上康俊九州大学大学院教授が学生とともに見学に来られる。23日、高所作業車から調査区全景写真を撮影。遺構実測が全て完了。作業員による埋め戻しを開始する。30日、埋め戻しが終了。以上をもって平成22年度の池ノ尾門跡における調査を終了した。

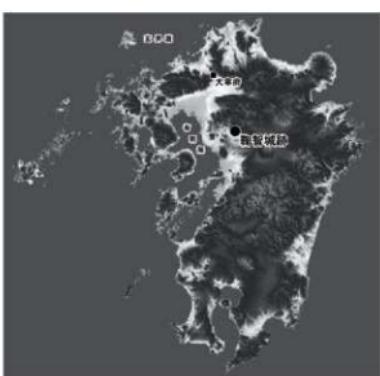
## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

鞠智城跡は、阿蘇外輪山麓から有明海へと西流する全長71kmをはかる菊池川の中流域に所在する。菊池川の中流域には肥沃な菊池平野が広がり、北東部には八方ヶ岳（標高1052m）がそびえる。鞠智城跡は八方ヶ岳から南西に延びる丘陵の先端部分に形成された「米原台地」と呼ばれる標高約145mの台地上に位置する。この米原台地は、南側に菊池平野が広がり、西側は初田川の浸食作用によってできた谷地形に面しているため、周辺の地形から独立した様相を呈している。そのため、標高は約145mと微高地ながらも周辺の眺望は開けており、南側は菊池平野から遠くは熊本市、南西側は金峰山系から雲仙普賢岳、東側は阿蘇の外輪山を望むことができる。また、鞠智城跡の西側約30kmには有明海が広がるが、その間を金峰山系に阻まれ、鞠智城跡から直接有明海を望むことはできない。また、北側は八方ヶ岳を主峰とする1000m級の山々からなる筑肥山地が横たわっており、地形的に鞠智城跡は北側の山々を背後として、南側を望むような状況にあつたといえる。なお、大宰府行政跡から鞠智城跡までは南東の方向に直線距離で約62km離れている。

今回の第32次調査を実施した池ノ尾門跡は、鞠智城跡の南西部に位置し、西側土壙線と南側土壙線をなす尾根が切れる険隘な谷部に所在する。この谷部は、鞠智城跡の中でも最も低い位置にあり、標高は約90m

をはかる。谷部の南西側には南側土壙線の尾根の斜面裾に沿って幅1mほどの小河川である塩井川が流れ、北側には水路が流れる。北側の水路は谷の最狭部で塩井川と合流し、その後塩井川は西流し、池ノ尾門跡から約600m先で内田川水系の初田川に注ぐ。塩井川が初田川に合流する地点には、「大門」という地名が残っており、鞠智城に関連する地名であると考えられている。塩井川に沿って現在、市道下本分-堀切線が通っており、池ノ尾門跡の所在する谷の北側斜面裾を通り、鞠智城跡内へいたる。大門から池ノ尾門跡までは険隘な谷地形が続くが、池ノ尾門跡を通り城内に入ると、米原台地と南側土壙線の尾根に囲まれた盆地状地形が広がる。



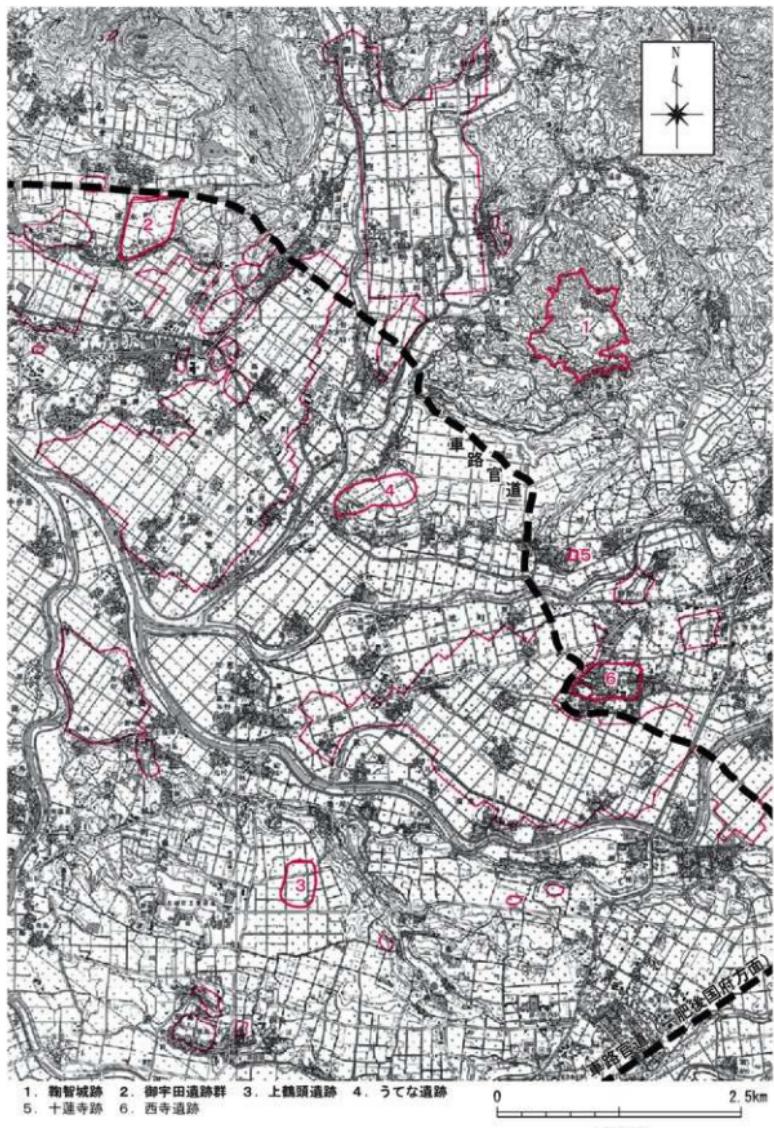
第1図 鞠智城跡の位置

### 第2節 歴史的環境

鞠智城跡が所在する地域には数多くの遺跡が残されている。ここでは、鞠智城跡と関わりの深い古代の遺跡についてのみ概観する。

鞠智城跡周辺の古代の遺跡としては、御宇田遺跡群（山鹿市）、上鶴頭遺跡・うてな遺跡・十連寺跡・西寺遺跡（菊池市）などがある。

御宇田遺跡群は、鞠智城跡の西側約4.5kmの御宇田台地上に位置する。昭和60～61年にかけて発掘調査が実施され、そのうち妙見第Ⅱ区の調査では、8～9世紀のものと考えられる三間×五間の底付き建物などの掘立柱建物群が中央広場を挟んで規則的に配列されて検出された。また、石製巡方や円面鏡などの官衙遺跡から出土することが多いとされる遺物や、越州窯青磁などの当時貴重とされた貿易陶磁器などが出土しており、山鹿郡家であった可能性も指摘されている。



第2図 鞠智城跡周辺主要遺跡分布図

上鶴頭遺跡は、鞠智城跡の南西約6.5kmの洪積台地上に位置する。昭和57年に調査が実施され、30m四方の中央広場を囲むように9世紀前半を中心とする16棟の庇付き大型建物跡が検出された。また、「正」「西正」等の文字が書かれた墨書き土器が20数点出土しており、官衙に関連する遺跡ではないかと考えられている。

うてな遺跡は、鞠智城跡の南西2.5kmの台地西側端部に位置する。これまで3次にわたる調査が実施されており、七ッ枝Ⅱ区からは、8世紀後半～9世紀前半の規則的な配置をする掘立柱建物群が検出された。また、三彩片や銅鏡片、墨書き土器などが出土しており、官衙に関連する遺跡ではないかと考えられている。

十蓮寺跡は、鞠智城跡から真南に約2.5km離れた台地の南側斜面に位置する。これまでの踏査や1965年に実施された発掘調査によって、奈良時代中期の鴻臚館式瓦の特徴をもつ軒丸瓦2種・軒平瓦2種が確認されており、菊池郡に付属する菊池郡寺とも考えられている。また、伽藍配置は、古代肥後國のほかの郡寺と同様に法起寺式と想定されている。

西寺遺跡は、鞠智城跡から真南に約4km離れた菊池川右岸の菊池平野部に位置する。遺跡が所在する西寺地区の北側と西側には、幅5～6m、高さ1.5mの土壘が確認されている。また、南西約300mに位置する南園地区からは8世紀末～9世紀初頭の多量の布目瓦が出土しており、この周辺一帯を菊池郡に比定する説もある。

このほか、菊池川流域や内田川流域には、大規模な条里の地割りが遺存している。また、延喜式以前の古代官道もこの地域を通っている。そのルートは、大水駅（熊本県玉名郡南関町）から御宇田遺跡群を通って、台地にいたり、そこを斜めに通過しながら西寺遺跡にいたるものである。官道は、西寺遺跡からさらに南東へ進み、花房台地で肥後國府方面へと通じるルートと阿蘇を経由して豊前・日向の国府へと通じるルートに分岐する。

なお、鞠智城跡の地理的・歴史的環境については、これまで刊行された鞠智城跡の発掘調査報告書でも詳しく述べられているので、併せて参照いただきたい。

#### 参考・引用文献

- 熊本県・熊本県教育委員会編 2010 「鞠智城跡の地理的・歴史的環境」『鞠智城東京シンポジウム古代山城鞠智城を考えるⅡ 東アジアの中の古代鞠智城 鞠智城の調査成果』熊本県・熊本県教育委員会

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

#### I. 発掘調査

池ノ尾門跡に対する調査は、これまで第1次調査と第26・27次調査の3次にわたって実施されている。昭和42年に実施された第1次調査においては、現存する門礎石が原位置を保っていないことが確認されるとともに、多数の塊石・切石が確認され、これらが石垣線をなす可能性があることが指摘された。その後、平成16・17年度に実施された第26・27次調査においては、池ノ尾門跡の全体構造の把握を目的として、西側土塁線と南側土塁線を分ける谷部最狭部のやや南東側を対象として調査が実施された。調査の結果、幅約9.6mの石垣のはか、通水溝、導水溝などの重要な遺構を確認したが、石垣や通水溝の構造などについては詳しく明らかにできなかった。

そのため、平成22年度の第32次調査では池ノ尾門跡の構造のさらなる解明のため、石垣背面の延長ライン、導水溝南側周辺部、通水溝の内部構造、通水溝の排水口の確認を目的として調査を実施した。

調査における土砂の掘削・運搬については、遺構の状況及び地形の制約からすべて人力によるものとした。掘削においては必要に応じてサブトレーナーを設定し遺構等の確認に努めた。その後、遺構実測図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影を実施した。なお、遺物の出土量は少量であったが、取り上げにあたっては、層位ごとに取り上げるとともに、一部の遺物については、光波測距儀を使用して個別の取り上げを行い、出土位置の座標や標高データを記録した。

遺構実測については、調査員が行うとともに、一部を埋蔵文化財調査専門の業者に委託した。実測作業にあたっては、調査区内の遺構の制約により、光波測距儀による実測作業と、1m間隔のメッシュを設定した上で実測作業を並行して行った。また、実測図面の縮尺は20分の1を基準として、必要に応じて10分の1の縮尺で作成した。なお、委託した図面に関しては、完成後、調査員が現地において確認し、修正がある場合はその場で指示し、正確な図面となるよう努めた。また、石垣背面の石積みや通水溝内部など重要な遺構の実測については調査員が行った。

写真撮影については、調査の各段階において、調査員が適宜、モノクロとリバーサルの2種類を用いて行った。カメラは中判カメラ（6×7）及び35mmカメラを使用し、必要に応じて使い分け撮影した。また、調査区全景写真は、高所作業車を使用し撮影を行った。

なお、調査期間中には調査状況に応じて、考古学、土木工学の専門的な知識を有する専門調査員の先生方を招聘し、現地において調査に関するご指導をいただいた。

埋め戻しについては、動く可能性のある石材をすべて土のうで固定し、さらに透水性シートを敷いた上に山砂を厚さ10cm以上かけて埋め戻しを実施した。

#### II. 整理作業

出土遺物の整理、図面の製図などの整理作業は、鷹智城・温故創生館にて行った。

出土遺物は、洗浄した後、注記作業を行った。すべての資料の注記作業が終了した後、接合作業を行い遺物の復元作業を実施したが、小破片が多く、接合するものはわずかであった。また、第26・27次調査における出土遺物との接合作業も行ったが、接合するものはなかった。なお、遺物の整理段階においては、古代の土器等に関する専門的知識を有する方に遺物を実際に見てもらい様々な意見をいただいた。

遺物の実測は、すべて調査員が行った。また、遺物実測図の製図はデジタルトレースソフト「トレースくん Cubic」を使用して調査員がデジタルトレースを行った。また、拓本作業は作業員が行い、それをスキヤ



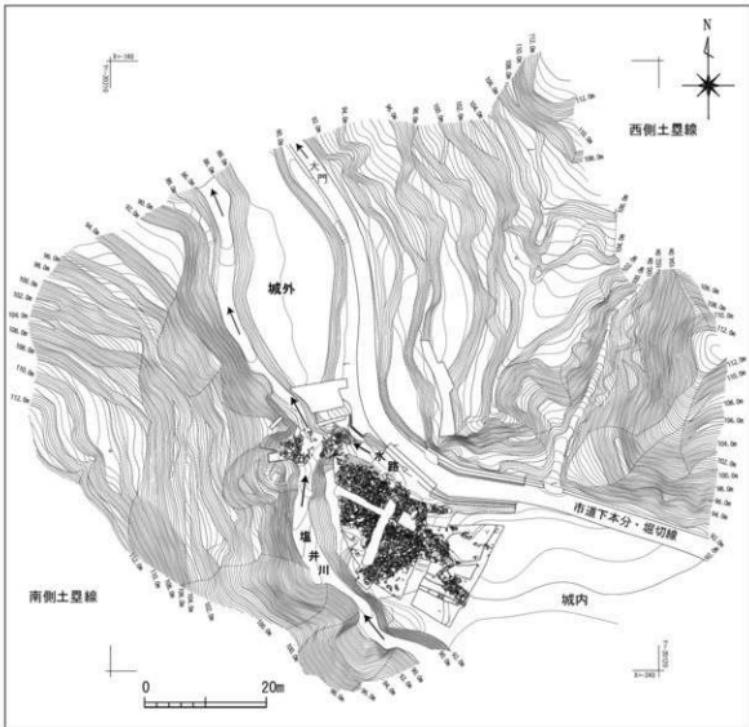
第3図 駒智城跡全体図 ( $S=1/8000$ )

ナで取り込んでデジタルデータ化した。

池ノ尾門跡調査区の遺構平面図、土層断面図、エレベーション図のトレース作業は業者に委託した。委託に際しては、調査員が委託業者に細かく指示を出すとともに打ち合わせを重ね、正確で見やすいトレース図となるよう努めた。

これらの完成した製図データは、Adobe社のソフト「IllustratorCS」を使用してレイアウト作業を行い、デジタルデータとして印刷会社に入稿した。

遺物写真撮影は、中判カメラ（ $6 \times 7$ ）を使用し調査員が行った。その際、モノクロフィルムを用いて撮影を行った。



第4図 池ノ尾門跡周辺地形測量図 ( $\$=1/800$ )

## 第2節 層序

池ノ尾門跡は、標高約90mと鞠智城跡の中でも最も低い位置に所在し、また、西側土堀線と南側土堀線に挟まれた狭隘な谷地形に位置することから、城内に降った水等が集中する地点である。そのため、池ノ尾門跡においては過去に何度も大水や土石流などにともなう大規模な擾乱を受けているようであり、池ノ尾門跡の各地点においても層序は一定しない。そのためここでは、池ノ尾門跡調査区内の各地点の土層について個別に述べることとする。各土層断面図の位置については、第7図を参照されたい。なお、池ノ尾門跡における地山層は、鞠智城跡の北側に位置する貯水池跡等と同じく花崗岩のバイラン土層である。

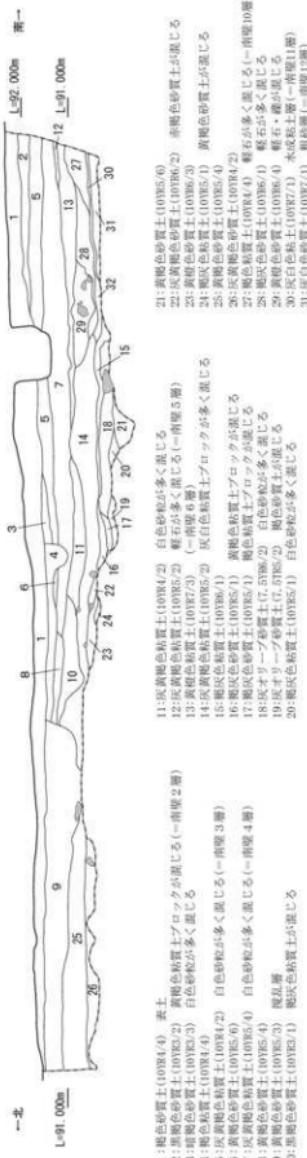
調査区東壁の土層（第5図）においては、北側は近年の水路等により大規模な擾乱を受けていた。9層は近年の水路によって削れられた後に堆積した土層である。南側には導水溝や導水溝南側周辺部の池状落ち込み遺構が土層断面にかかる。池状落ち込み遺構における土層は粗砂からなる灰白色砂質土層（31層）の上に厚さ約6cmの灰白色粘土の水成粘土層（30層）が池状落ち込み遺構の範囲に広がる。この水成粘土層は池状落ち込み遺構に水の滲留があったことを示すものである。水成粘土層の上には1~5cmの軽石が混じる褐色粘土層（27層）、及び同じく軽石が混じる褐灰色砂質土層（28層）が広がる。これらの層は池状落ち込み遺構の範囲のみではなく、その西側に所在する盛土状遺構の範囲にも広がっている。この層からは古代の須恵器や土師器といった遺物が出土しており、池状落ち込み遺構や盛土状遺構が埋没していく過程で堆積した土層であると考えられる。この27・28層より上層からは遺物の出土はみられなかった。

調査区南壁の土層（第6図）は調査区東壁から続く土層であり、その東側には池状落ち込み遺構が存在し、西側には盛土状遺構が存在する。12層は、東壁31層と同じ層であり、粗砂からなる灰白色砂質土層である。その上層の11層は東壁30層と同じ層であり、灰白色粘土の水成粘土層である。これらは、土層断面図からもみてとれるように、池状落ち込み遺構の範囲にしか広がらない土層である。また、10層は東壁27層と同じ層であり、ここからは須恵器や土師器が出土した。なお、池状落ち込み遺構より西側の10層の下層は盛土状遺構が存在するため掘り下げを実施していないが、10層はその盛土状遺構を覆うように堆積している。

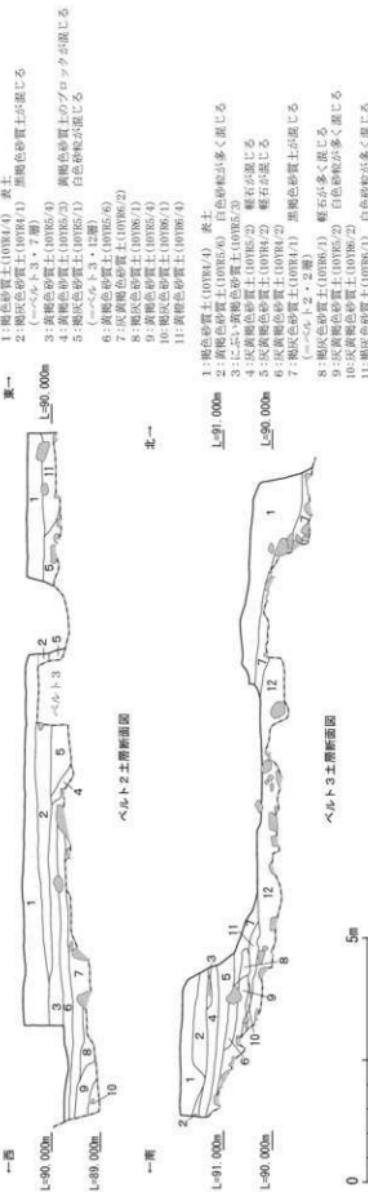
ベルト1は調査区の東側において南北方向に設定した土層観察用のベルトである。このベルト1の土層（第6図）は、9層より上層は水平堆積ではなく、南から北に向けて傾斜しながら堆積しており、これは、南側に所在する南側土堀線の尾根から土砂が流入したことによるものと考えられる。12層は、南壁10層と同じ層であり、この下層には盛土状遺構が存在する。

ベルト2は調査区の西側において東西方向に、石堀前面から石堀内部にかけて設定した土層観察用のベルトである。このベルト2の土層（第5図）は、石堀が崩壊した後に散在した石材の上に堆積した層であり、それより下層は石堀の石材が覆っているため掘り下げは行っていない。石材を覆う層からは、古代から中世にかけての土器が、第26・27次調査及び今回の調査において出土した。

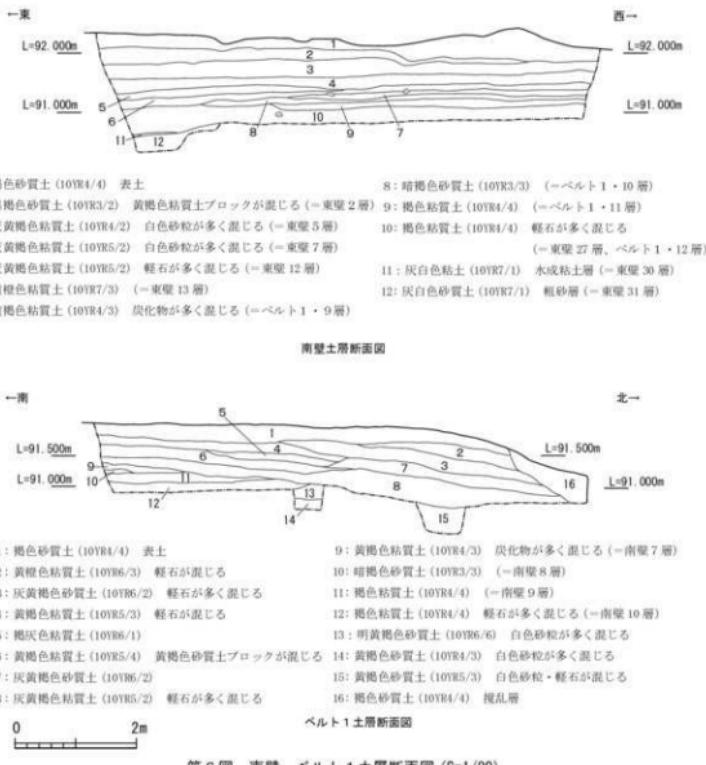
ベルト3は調査区の西側において南北方向に設定した土層観察用のベルトである。このベルトの土層（第5図）はベルト2の土層と同じく、石堀が崩壊した後に堆積した層である。そのうち、7層及び12層が崩壊した石堀の石材を覆っており、これらの層から古代から中世にかけての土器が出土した。南側は現地形においても北側より約1.5m高くなっている、南側土堀線の尾根の裾がこのあたりまで延びてくるものと考えられる。



東壁土層断面図

—北—  
—南—

第5図 東壁、ベルト2、ベルト3土層断面図 (S=1/100)



第 6 図 南壁、ベルト 1 土層断面図 ( $S=1/80$ )

### 第3節 調査の成果

#### I. 遺構

池ノ尾門跡を対象とした第32次調査（以下、今回の調査とする）は、平成16・17年度に実施した第26・27次調査（以下、前回調査とする）の追加調査であり、調査面積は405m<sup>2</sup>である。今回の調査においては、前回調査時に確認できなかった石壙背面の延長ライン、導水溝南側周辺部、通水溝の内部構造、通水溝の排水口の確認を目的として調査を実施した。

調査の結果、石壙背面の延長ラインの確認においては、調査区の南西部において花崗岩と安山岩系の石材から構成される4～6段分の石積みを確認するとともに、石壙の背面が緩やかにカーブしながら延びていくことが明らかとなった。また、導水溝南側周辺部では、池状の落ち込み遺構を確認し、そこに水成粘土の堆積がみられることから、一時的に水が滞留していたことが明らかとなった。この池状落ち込み遺構の前面（城外側）には、褐灰色粘質土とぶい黄橙色砂質土が交互に積み重なった低平な盛土状遺構が確認された。通水溝の内部構造については、擾乱によって通水溝の蓋石が動いていた箇所において原位置を動いている石材を除去して確認した結果、通水溝の底石と想定される平石3石を検出した。また、通水溝の排水口については、推定される箇所の掘り下げを実施したが、当該箇所における後世の水路による擾乱がひどく、明確な排水口の位置を確認するまでにはいたらなかった。そのほか、今回の調査においては前回調査で確認していた遺構の図化作業等もあわせて実施した。

##### ①石壙

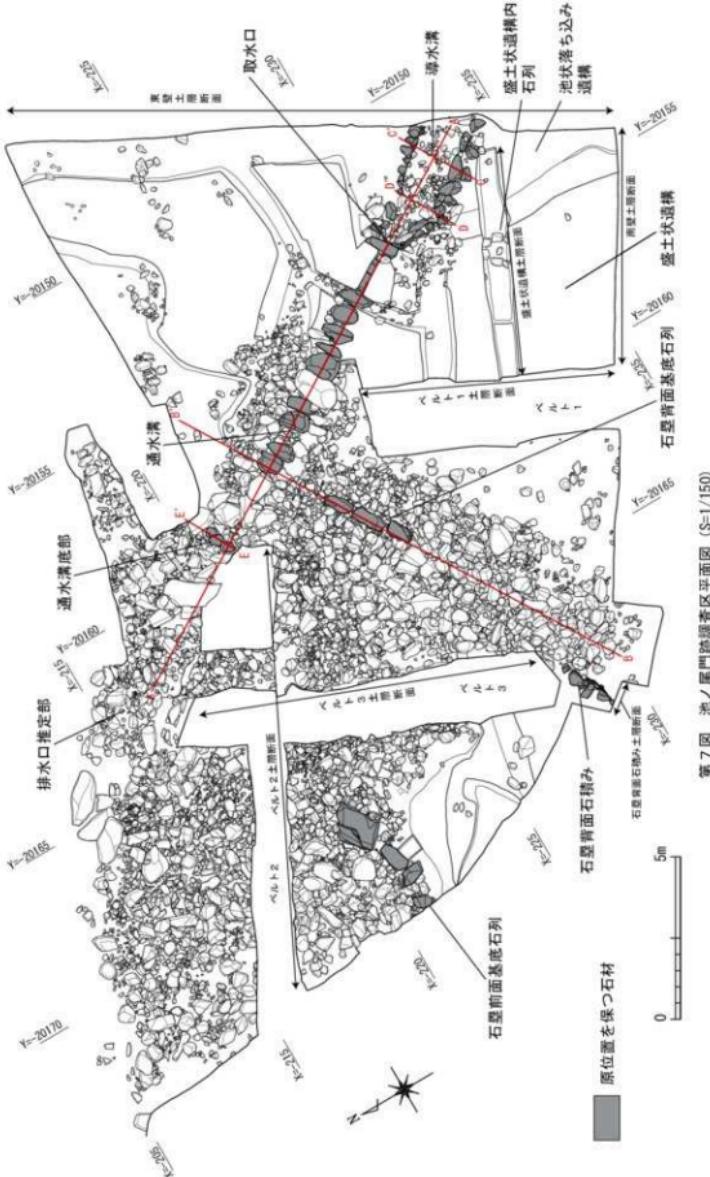
池ノ尾門跡における石壙の存在は、昭和42年度に実施された第1次調査において指摘されていた。第1次調査においては、門の原位置を確認するため、門推定地点における発掘を行ったところ、掘削作業中に多数の塊石・切石が一定の範囲に広がっていることが確認された。これらの石材の配列に規則性などはみられなかつたが、これらの石材が「石垣線」をなす可能性が高いことが指摘された（鳥津編1983）。

その後、平成16・17年度に実施された前回調査においては、石壙上部は崩壊していたものの、石壙前面及び背面の基底石が確認され、池ノ尾門跡に幅約9.6mの石壙が存在したことが明らかとなった（矢野編2006）。

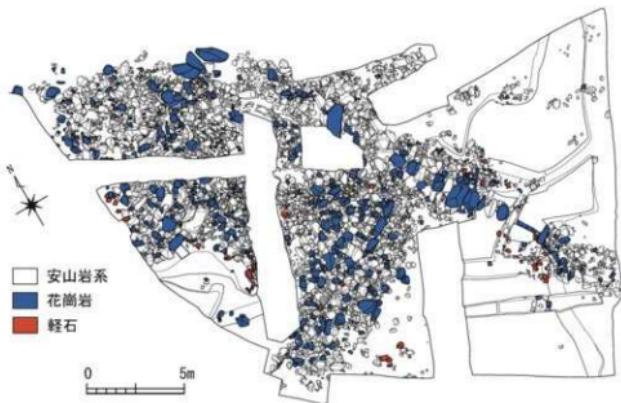
石壙は、池ノ尾門跡が所在する谷に直交する形で北東から南西に向かって延び、南西側を塙井川、北東側を水路及び道路によって寸断され全長は不明であるが、少なくとも約12mはあったものと推定される。現状では、石壙は大部分が崩壊し、周辺に石壙を構成していたと考えられる石材が散在している状況である。周辺に散在しているのは、花崗岩と安山岩系の石材であり、この2種の石材が石壙の構成石材であったと考えられる。なお、石壙部も含めて池ノ尾門跡には軽石も散在するが、これは石材として用いられたのではなく、駒智城内に分布する火碎石堆積物が流れ込んできたものと考えられる。

石壙は大部分が崩壊しているが、谷部中央付近よりやや南西側において、石壙前面の基底石が約3.5m分残存している。原位置を保つものとして確実なのは4石で、これらは直線状ではなく緩やかに弧を描きながら配列されている。基底となる石材の配列は、北東端の石材とその西隣の石材間に約20cmの間隙が認められるものの、それより西の石材との間にはほとんど間隙がない。各石材上面の高さは、北東端の安山岩系の大型石材のみが他よりも40cmほど突出した状況で、そのほかはほぼ揃う。この北東端の大型石材のみ石積み2段分の高さになるものと考えられる。各石材の城外側の面は不揃いで凸凹が認められるが、全体的に面を合わせようという意識はみられる。この石壙前面は北東側へと続くものと想定されるが、現状で北東部は崩壊した石壙の石材が散在しており、その延長部分は確認できていない。

また、石壙の背面においては中央付近に基底石が約2.8m分残存している。確認されたのは3石で、いず



第7図 池ノ尾門跡調査区平面図 ( $S=1/150$ )



第8図 池ノ尾門跡調査区石材分布図 (S=1/250)

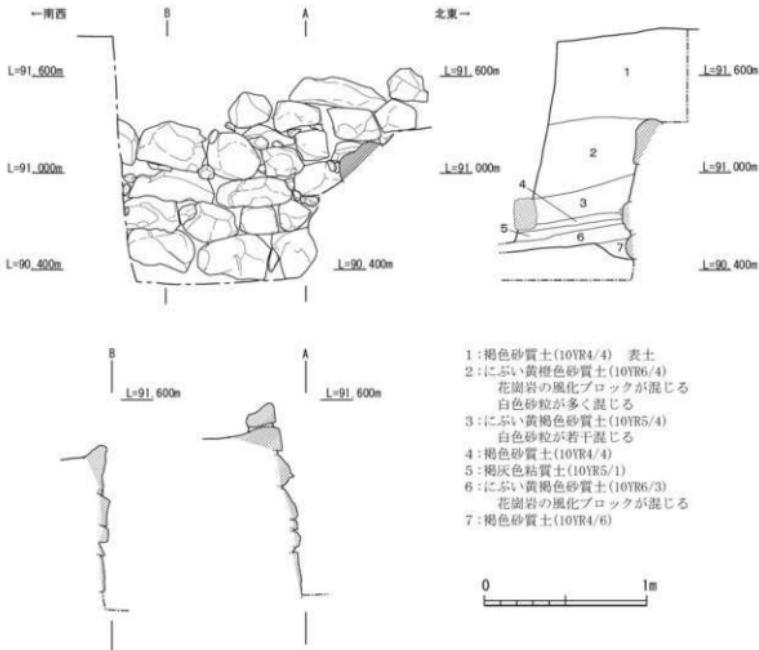
れも材質は花崗岩であり、平面略長方形を呈し、北東から南西に向けて直線的に延びる。北東側から、約90×40cm大、約115×40cm大、約80×40cm大の平面略長方形の石材を、短辺を合わせた形で正面に向かって横長に並べる。この石列は、南西端の石材から約2m城内側に地山の平坦面が認められ、それが石材底面のレベルとそれほど相違がないことから、石壙の基底面を構成する石材とみてはほほ間違いないものといえる。石材の配列については、北東端の石材と次の石材との間に数cm、その次の石材との間には約15cmの隙間が認められる。3石の上面高はほほ揃っている状況にあるが、城内側に向いた側面は多少凹凸があり不揃いとなる。それに比べ、石壙内部側の側面は面を揃えているような状況がみてとれる。

#### 石壙背面石積み（第9・10図）

前回調査で確認された石壙背面のラインがどのように延びていくのかを確認するため、その南西側において石壙背面の延長部分と推定される箇所の掘り下げを行った。なお、北東側は後世の水路によって搅乱を受け、石壙の痕跡は全く残っていない。

掘り下げを行った箇所は、前回調査時に土層観察用として残しておいたベルト3の南西端部となる。この箇所を掘り下げた結果、長さ約1.9mにわたって、4～6段の石積みを確認した。石積みの高さは約1.2mである。この石積みに使用されている石材は花崗岩と安山岩系の石材であり、それぞれに顕著な加工痕はみられない。また、それぞれの石材の配置にも規則性はみられない。1つの石材のサイズはおよそ横幅約30～60cm、高さ約15～30cmであり、比較的小ぶりな石材を使用している印象を受ける。また、この石積みの基底石として合計3石を確認した。どれも横幅約40cm、高さ約25cmの大きさで、横長の石材を使用しているが、石積み上部の石材と大きさにおいてそれほど違いはない。また、石壙背面の中央部における3石の基底石のサイズはどれも長さ80cm以上であるが、それに比べるとかなり小ぶりの石材である。積み方は石材と石材の間に粘土等を充填せず石材のみを積み上げる空石積みとし、横目地が通る積み方を意識して積んでいるようである。また、石材と石材の間隙には小さな石を入れ込んでいる。

また、この石積みの裏込めの有無については明確ではないものの、石積みの上端裏側をみると、裏込め

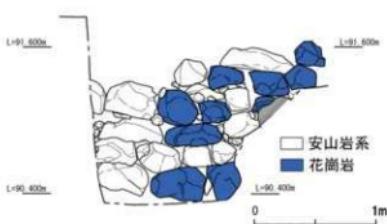


第9図 石壘背面石積み (S=1/30)

らしきものは確認できなかった。この石積みの上端が、築城当時の石壘の天端となるかどうかは明らかではないが、現況の石積み上端と石壘背面の中央部で確認されている石壘基底石との比高差が約1.35mあるため、石壘中央部においては少なくとも約1.35m以上の石積みがあったことがわかる。なお、今回の調査において確認された石積みの基底石と中央部の基底石の比高差は約50cmあり、石壘の構築にあたって土地を造成して平らにするのではなく、元々の斜面地形に合わせて石壘を構築したことがみてとれる。

また、石積み前面の土層断面の観察からは、石積みの基底石は地山を12cmほど掘りくぼめて設置している

ことが確認された。なお、この石積みの南西側は調査区外へと続いているが、その先は塩井川による削平を受けており石積みは残存しないものと考えられる。また、北東側は中央部の基底石列との間に石積みが残存するものと考えられるが、石壘から崩壊した石材で覆われているため延長部は未確認である。なお、石壘背面中央で確認されていた石壘背面の基底石3石と今回新たに検出した石壘南西部の石積みのラインをつなぐと、石壘背面のラインは西側にいくにつ

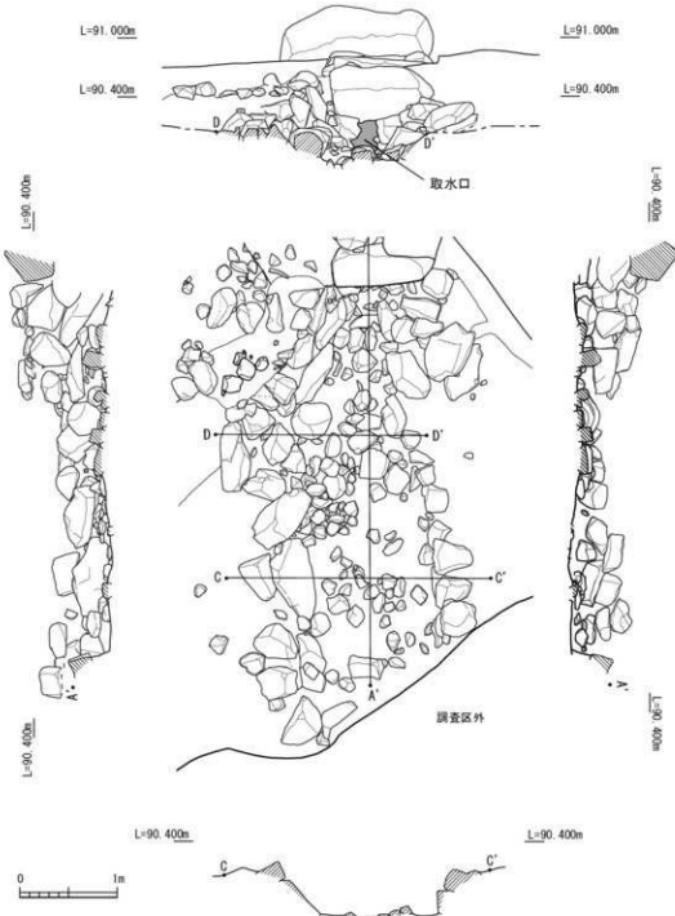


第10図 石壘背面石積み石材分布図 (S=1/40)

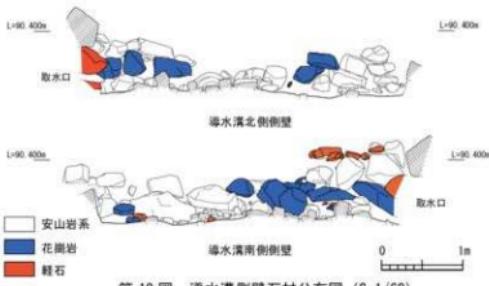
れて緩やかにカーブし、城内側にやや膨らんでいる状況がみてとれる。石垣前面南西側の基底石列も同じようにカーブしており、池ノ尾門跡の石垣の平面形は全体的に緩やかにカーブする形態であったことがわかる。

#### ②導水溝（第11・12図）

導水溝は、前回調査において通水溝取水口の前面で検出された通水溝へ水を導くための溝である（矢野編2006）。この導水溝は、底幅0.7～1.2m、深さ約40cmの断面逆台形を呈する溝で、側壁を石積みとし、蓋石は



第11図 導水溝見通し断面・断面図 ( $S=1/50$ )



第12図 導水溝側壁石材分布図 (S=1/60)

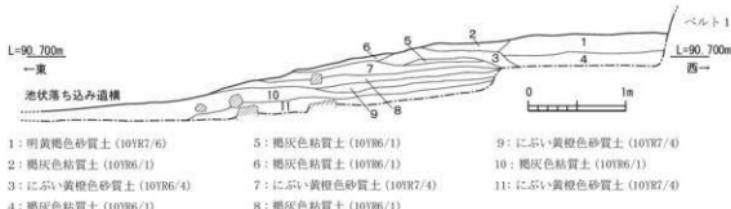
幅が通水溝取水口の幅と同じ約70cmとなる。また、北側の側壁の立ち上がりの傾斜は約70度であるのに対し、南側の側壁の立ち上がりは約45度であり、南側の側壁のほうが傾斜が緩い。側壁の高さはどちらも取水口に向かって徐々に高まり、取水口手前においてはそれぞれ3段の石積みが認められる。また、南側の側壁においては取水口部蓋石周辺から約1.4mの範囲にわたって粘土の被覆がみられる。その粘土被覆部からは須恵器の壺蓋（第18図-12）が出土した。なお、側壁を構成する石材は石墨等と同じく花崗岩と安山岩系の石材が主体となる。導水溝の底部は10~30cmほどの小さな石材が散在しており、おそらく溝底部の敷石になるものと考えられるが、明確な敷石の痕跡は確認できていない。

#### 導水溝南側周辺部（池状落ち込み造構・盛土状造構）（第13図）

前回調査においては、導水溝の南側部分について調査を実施していなかったが、今回の調査では、導水溝周辺部の構造を明らかにするため、導水溝南側の約23mの範囲において掘削を行い調査を実施した。その結果、池状の落ち込み造構とその前面（城外側）に盛土状造構を確認した。

池状落ち込み造構は導水溝の南西側の側壁から南東方向に向かって広がり延長はさらに未調査区へと続く。西側には盛土状造構があるが、池状落ち込み造構はそこから東側に向けて徐々に低くなり、最も深いところで深さ約80cmをはかる。池状落ち込み造構の下層には軽石の礫とともに水成粘土が約6cm堆積しており、ある時期に水の滞留があったものと考えられる。

池状落ち込み造構の西側には盛土状造構が存在する。これは落ち込みに溜まった水を堰きとめるかのように存在し、池状落ち込み造構から緩やかに立ち上がっていく。前回調査で設定したトレーニングの断面を観察したところ、この盛土状造構は、褐色粘質土とにびい黄橙色砂質土がそれぞれ約8~12cmの厚さで交互に積



第13図 盛土状造構土層断面図 (S=1/50)

置かず開渠としている。これまでの調査で長さ約4.6m分が検出され、さらに延長は南西方向の未調査区へと続いている。側壁においては、現状で1~3段程度の石積みが認められる。北側の側壁は取水口に向て直線状に延びるに對して、南側の側壁はややカーブしながら取水口に向て徐々に狹まる。取水口部蓋石の現位置から約1.5mの箇所において導水溝の

まれており、版築状を呈していることが確認できた。

また、盛土状造構から池状落ち込み造構に向けて徐々に低くなってくる箇所において、南北方向に向かって平行する2列の石列が前回調査におけるトレンチ内で確認されている。これは幅約80cmのトレンチ内における検出のため全容は明らかではないが、おそらく通水溝の取水口南側から南東方向へ、池状落ち込み造構の縁に沿って延びるものと想定される。現状では、それぞれ1列に3石ずつ合計6石分が検出され、石材は最も大きいもので26×34cmをはかる。横長の石の長辺を池状落ち込み造構側に向けて並べており、石材は花崗岩と安山岩系の2種類がある。また、この盛土状造構のトレンチ内部からは、丸瓦片（第20図-21）が出土した。この盛土状造構の西側は石壙背面方向へと続くが、石壙背面周辺からは盛土状造構は検出されておらず、この盛土状造構は石壙まではいたらないものと考えられる。

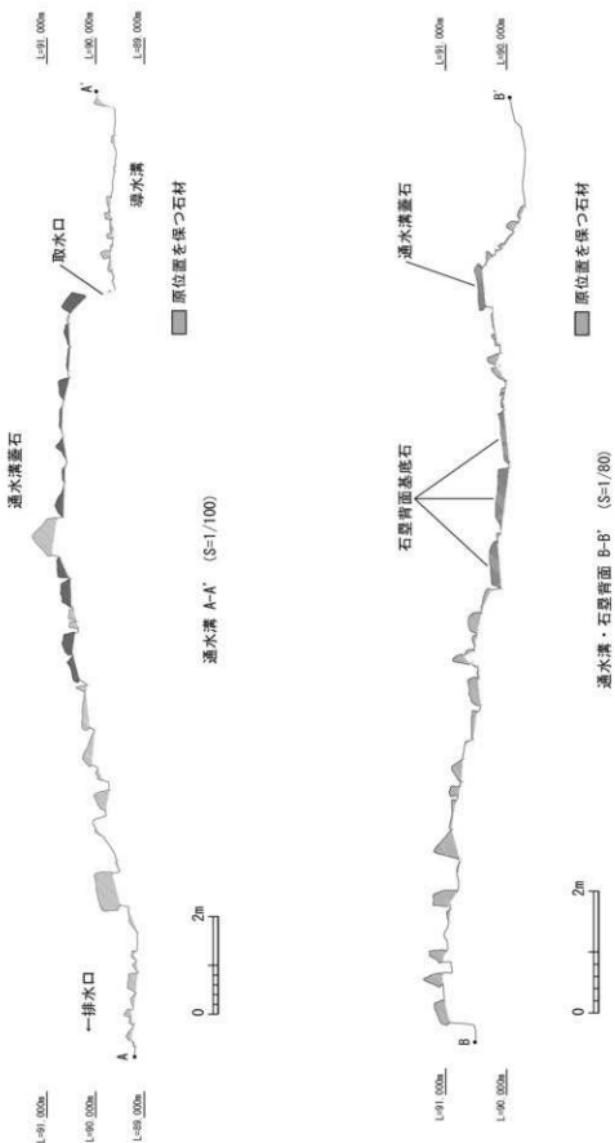
### ③通水溝（第14図）

通水溝は、前回調査において谷の中央部よりやや北東寄りで確認された暗渠状の通水路である（矢野編2006）。城内の水を石壙の下を通して城外に排出する役割をもち、石壙には直交する形で、南東から北西にかけて存在する。南東側に設けられた取水口は谷のはば中央付近に設けられている。北西の排水口側は後世の水路により搅乱を受けており、その位置が明確ではないため通水溝の全長は不明である。しかし、石壙前面基底石列の延長ラインと通水溝の延長ラインが交わるところに排水口があったものと想定すると、通水溝は全長約16mの規模であったことが推定される。また、通水溝の取水口は石壙背面で確認された基底石列の延長線上から約7.5m南東側の地点に設けられている。

通水溝の蓋石は、推定も含め合計で17個が現存する。そのうち、取水口部の蓋石は前のめりとなり前方にやや落ち込んでいたが、それに続く7石の蓋石、約4m分が原位置を保っている。取水口から9石目の蓋石は約80×150cmをはかる大型の石材であるが、通水溝の側壁上部よりかなり浮いていることから原位置を保っていないものと考えられる。その後の4石は若干動いてはいるもののほぼ原位置を保っていると考えられるが、それより北西側の蓋石は後世の水路による搅乱などによって原位置を保っていない。蓋石には横長で大型の花崗岩あるいは安山岩系の石材を使用し、前後隙間なく側壁の上部に横架したものと考えられるが、上面を揃えるような意識は働いていない。現存する蓋石のうち、花崗岩は11石、安山岩系は6石であり、花崗岩のほうが多用される傾向にある。特に取水口部の蓋石は、石材に花崗岩を使用し、蓋石前面及び上面を平滑に仕上げるなど、露出部であることを意識した加工が認められるが、その他の蓋石には明瞭な加工はみられない。

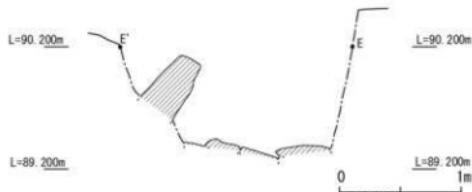
### 内部構造（第15図）

前回調査においては、通水溝を検出したもののその内部構造の確認までいたらなかった。そこで今回の調査では、取水口から排水口に向かって約10mの、通水溝の蓋石が流出している箇所において、通水溝内部の構造確認のため下部を掘り下げて調査を実施した。その結果、後世の水路による搅乱を受けてはいたが、通水溝の底石と考えられる扁平な石を3石確認した。それぞれ約32×36cm、36×40cm、36×44cmの大きさで床に敷いたような状態で検出された。石材はすべて安山岩系の石材であり、検出された底石上面の標高は約89.3mをはかる。側壁は搅乱のため明確ではなかったが、板石を立て、その平たい面を通水溝内部側に向かって側壁としているような状況がみられた。なお、石壙背面より城内側の通水溝の側壁は、細長い石材を使用し、小口部を通水溝内部側に向けて数段積んだ構造となる。また、取水口の側壁は、南壁においては、横長の石材を使用し、長辺側を通水溝内部に向け2段に積む構造であり、北壁においては、石材の小口部を内側に向けるものと、長辺側を内側に向けるものが混在しながら3段に積む構造が確認される。このことか



第14図 通水溝・石壙背面断面図

ら、通水溝の各地点において、側壁の築造方法が異なることがわかる。また、側壁の構成石材は、花崗岩と安山岩系の両方が用いられているが、安山岩系のほうが多用される傾向にある。また、今回の調査において検出した通水溝の底石と取水口の底部のレベル差は約



第15図 通水溝底部断面図 (S=1/40)

30cmで、傾斜角は約2.4度となり、通水溝内部の傾斜はかなり緩やかなものであったことがわかる。

#### 取水口（第11図）

取水口は、開渠状の導水溝を流れてきた水を暗渠状の通水溝に導き入れる部分にあたる。現状では取水口に流れ込んできたと思われる大型の軽石の塊が取水口にはまっているが、本来の内法は、幅、高さともに約70cmではほぼ正方形を呈する。取水口底部の標高は約89.6mをはかる。取水口内部には、流れ込んだものと考えられる土砂や軽石等が詰まった状態であったが、取水口蓋石端から通水溝内部に約30cm入り込んだ部分より、通水溝底部から約10cm浮いた状態で土師器壺（第17図-1）が底部を上に向けて出土した。

#### 排水口

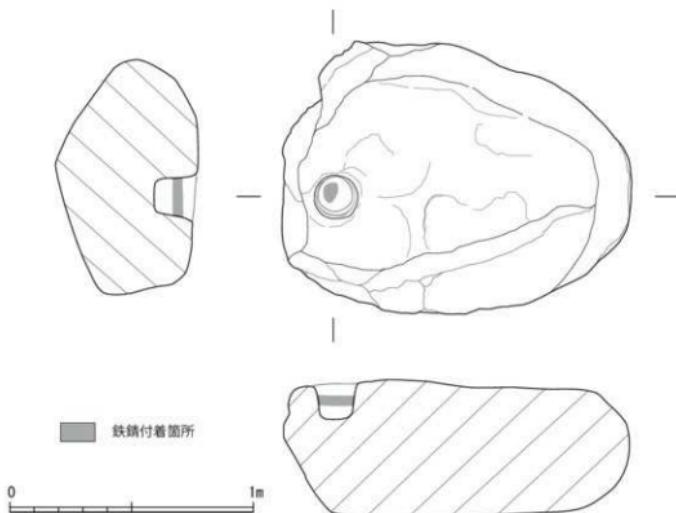
通水溝の排水口については、その推定箇所において後世の水路による擾乱が激しく、前回調査において明確に検出できていなかった。そこで、今回の調査においては通水溝の延長ラインと石壠前面のラインが交わる地点が排水口の位置となることを推定し、その周辺を掘り下げて調査を実施したが、やはり後世の水路による擾乱のため、今回の調査においても排水口は確認できなかった。

#### ④門礎石（第16図）

池ノ尾門跡における門礎石は、第1次調査において1基が確認されたが、それと対となる門礎石はこれまでのところ確認されていない。今回の調査においても周辺の踏査を実施したが、新たな門礎石を確認することはできなかった。なお、池ノ尾門跡の門礎石には柱をのせた痕跡がないため、厳密には門礎石ではなく、「唐居敷」というべきものであるが、これまでの鶴智城跡の研究史上、これを「門礎石」と呼称してきており、今回はそれを踏襲することとする。

池ノ尾門跡の門礎石については、第1次調査において初めて調査が実施された。この調査の際は、門礎石は地表下約50cmに埋没していた。門礎石の周辺を発掘した結果、赤色砂土、青色粘土、花崗岩砂土、灰色砂土、黒色砂土等が、塊石とともに乱雑に堆積しており、門礎石は原位置を保っていないことが明らかとなつた。また、軸摺穴の内部に摩滅があることや鉄錆の痕跡があることが観察されるとともに、門礎石の図化作業も行われた（島津編1983）。

今回の調査では、あらためて門礎石の観察と図化作業を実施した。この門礎石は、長軸約1.45m、短軸約1.11m、厚さ約58cmをはかり、平面横円形を呈する。石材は花崗岩である。上面には明瞭な加工痕は残っていないものの概ね平滑であり、下面是断面三角形状を呈する。上端には端部に近い側に径約18cm、深さ約15cmの軸摺穴が存在する。この軸摺穴の底部はかなり摩滅しており、内壁も若干摩滅している。また、軸摺穴の最深部は若干片側に偏る。この軸摺穴の底部及び内壁には鉄錆と考えられるものが付着しているが、このうち底部に残るものについては軸受けの機能をもつ鉄製受皿等の痕跡を示す可能性がある。また、内壁に残



第16図 池ノ尾門跡 門礎石 (S=1/20)

るものは、幅約4cmの帯状を呈して軸摺穴内を1周しており、これは扉軸下部に鉄製の帯状のものを巻いていたことを示す可能性もある。なお、この池ノ尾門跡の門礎石の側面には、堀切門跡の門礎石にみられる掘立柱の門柱を添える刺し込みなどの加工痕跡はみられないが、おそらく池ノ尾門跡の門礎石には堀切門跡の門礎石と同じく掘立柱の門柱がセットとなっていたものと考える。

鞠智城跡からはこれまで、深追門跡、堀切門跡、池ノ尾門跡の3ヶ所の城門跡においてそれぞれ1基ずつの門礎石が確認されている。堀切門跡の門礎石は、1つの石に2つの軸摺穴が存在する特徴的な形態をもち、池ノ尾門跡と深追門跡の門礎石は、1つの石に1つの軸摺穴が門礎石の端部に近い側に存在する形態をもつ。池ノ尾門跡の門礎石はそれらの門礎石の中でも最も小さいものである。

#### （参考・引用文献）

島津義昭編 1983 「鞠智城跡」熊本県文化財調査報告第59集 熊本県教育委員会

矢野裕介編 2006 「鞠智城跡－第26・27次調査報告－」熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温泉創生館

## II. 遺物

### ① 遺物の出土状況

池ノ尾門跡では、城門跡という遺構の性格上、遺物の出土は少ない。前回調査においては、須恵器・土師器のほか、瓦が出土した。今回の調査においては、新たに掘削を行った範囲も狭かったこともあり、遺物の出土は少なかった。そのような中でも、取水口内部から完形に近い土師器壺が出土したほか、須恵器、土師器、瓦が出土したが、細片が多く図化できるものは少ない。また、摩耗を受けているものが少なからずみら

れるが、これらは城内で廃棄された遺物が流されてきて最終的に池ノ尾門跡で土中に埋没したものと考えられる。特徴的な遺物の出土状況として、丸瓦（第20図-21）は、導水溝南側周辺部の盛土状構造の内部から出土した。また、完形に近い土師器坏（第17図-1）は取水口内部から通水溝の底部より浮いて、底部を上に向かって状態で出土した。

## ②出土遺物（第17～20図）

1は土師器の坏である。底部は平たく、体部は丸みをおびて立ち上がる。頸部はくびれ、そこから緩く外反して、短い口縁部をつくりだしている。体部中央よりやや上位に最大径をもつ。内面にはロクロ成形の痕跡が残り、丁寧な回転ナデを施している。内面底部は不定方向へのナデを施している。外面は、丁寧な回転ナデを施し、外面底部はヘラケズリの後、不定方向への丁寧なナデを施している。精選された胎土を使用しており、全体的にかなり丁寧なつくりとなっている。

2、3は土師器の高台付坏である。2は底部の破片である。内面はミガキが施され、外面はナデが施される。底部には高さ約0.7cmの高台がつく。内面は黒色処理が施されており、胎土には白色の砂粒を多く含む。3は底部の破片である。内外面ともにナデが施される。底部には高さ約1.7cmの高台がつく。胎土には砂粒を多く含む。

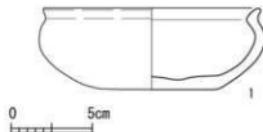
4から6は土師器の坏である。4は底部の破片である。内外面ともにナデが施される。底部は坏部成形後に貼り付けられている。5は底部の破片である。内外面ともにナデを施している。底部はヘラ切り後ナデを施している。6は底部の破片である。内外面ともに回転ナデが施される。

7は土師器の皿である。底部は丸みをもち、やや屈曲しながら口縁部にいたる。口縁端部は若干尖りぎみとなる。内面は丁寧なヨコナデを施している。外面はヨコナデを施し、底部は不定方向へのヘラナデ調整を施している。

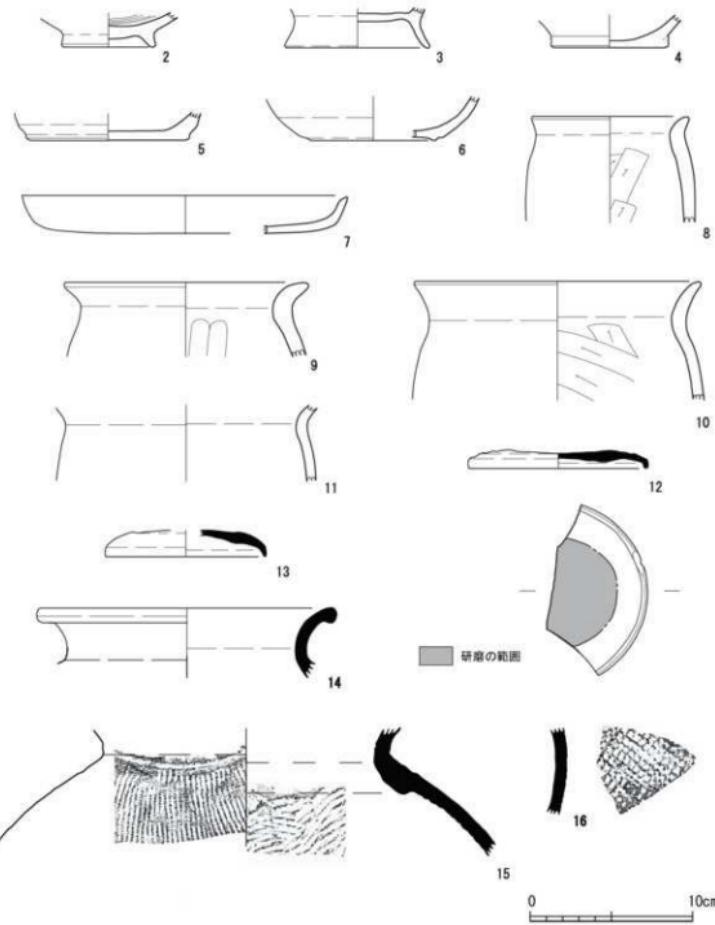
8から11は土師器の壺である。8は、口縁部から体部にかけての破片である。内面は、頸部より下位にはヘラケズリを施し、口縁部及び外面にはナデを施している。白色の砂粒が多く含まれる。口縁部は短くわずかに外側に開く。口径が小さく、口縁端部は丸くおさめる。9は、口縁部から頸部にかけての破片である。内外面ともにナデを施している。器壁が比較的厚く、口縁端部は丸くおさめる。10は、口縁部から体部にかけての破片である。内面は、頸部より下位にはヘラケズリを施し、口縁部及び外面にはナデを施している。口縁部は頸部から緩やかに開く。口縁端部は丸くおさめる。11は、頸部の破片である。内外面ともにナデを施している。器壁は比較的薄い。

12、13は須恵器の坏蓋である。12は、器高が低く、扁平な形状を呈している。内面は回転ナデを施し、外面は回転ナデ、天井部付近はヘラ切り後、丁寧にナデを施している。また、内面中央部には円状に研磨の痕跡が残っているため、転用視として使用されたと考えられるが、墨痕は残っていない。13は、器高が低く、扁平な形状を呈する。内外面ともに回転ナデを施している。白色の砂粒を多く含む。

14から19は須恵器の壺である。14は、頸部から口縁部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデを施している。口縁端部から内面にかけてうっすらと濃緑色の自然釉がかかる。15は、頸部から体部にかけての破片である。内面には同心円文当て具痕が残り、外面は格子目タタキがみられる。焼成は良好で、かなり硬質である。16は、体部の破片である。内面にはナデを施し指頭圧痕が残る。外面には格子目タタキがみられる。17は、体部の破片である。内面には同心円文当て具痕が残り、外面には格子目タタキがみられる。18



第17図 池ノ尾門跡出土遺物実測図（1）

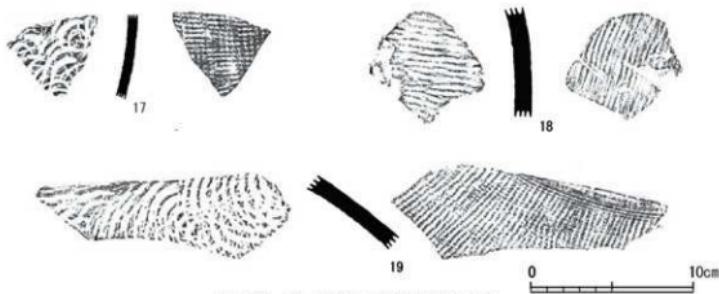


第18図 池ノ尾門跡出土遺物実測図（2）

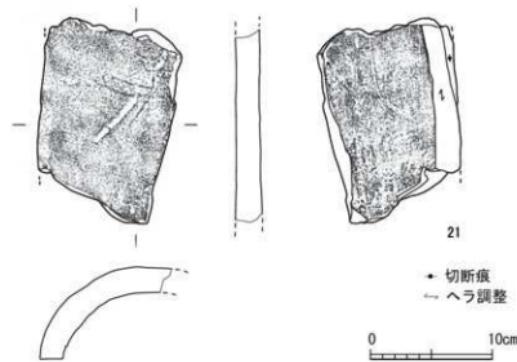
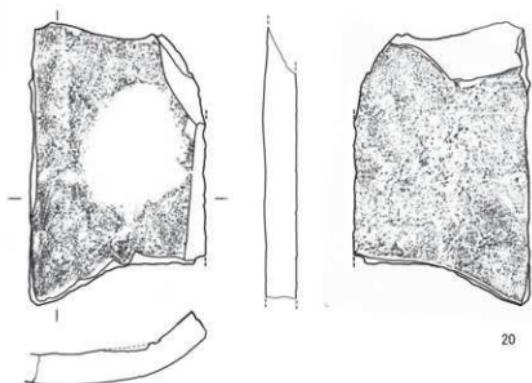
は、体部の破片である。内面には平行當て具痕が残り、外面には平行タタキがみられる。破損後、破片の割れ口を整えたような痕跡が確認できる。19は、頸部付近の破片である。内面には同心円文當て具痕が残り、外面には格子目タタキがみられ、頸部は回転ナデを施している。焼成は不良である。

20は、平瓦である。凹面にはやや粗い布目圧痕、模骨痕及び糸切り痕が残り、凸面は横方向へのヘラケズリ後、丁寧なナデを施している。側面部は分割後、未調整のままである。

21は、丸瓦である。凹面には粗い布目圧痕と分割界線が残り、凸面は丁寧なナデを施している。また、凸面には約3.5cm幅のヘラ先の痕跡が残る。側面部は分割後、ヘラケズリを施している。



第19図 池ノ門跡出土遺物実測図（3）



第20図 池ノ尾門跡出土遺物実測図（4）

第1表 遺物観察表(土器)

図版番号	種別 器種	出土地点	法量 [cm] (口径、底径、器高)	色調 (外/内)	胎土	調整	焼成
1	土師器 环	取水口内部	復13.2 7.8 5.0	橙/橙	0.5~1.0mm の砂粒をわざかに含む	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ、ナデ	良
2	土師器 环	調査区一括	5.8 残2.1	にぶい橙/黒	0.5~1.0mm の砂粒を含む	外: ナデ 内: ミガキ	良
3	土師器 环	石墨集石中	8.8 残2.9	浅黄橙/浅黄橙	0.5~2.0mm の砂粒を含む	外: ナデ 内: ナデ	良
4	土師器 环	導水溝南側周辺部 一括	復7.2 残2.0	にぶい黄橙/ にぶい黄橙	0.5~1.0mm の砂粒を含む	外: ナデ 内: ナデ	良
5	土師器 环	石墨集石中	復9.4 残1.7	にぶい黄橙/ にぶい黄橙	0.5mm程度の 砂粒をわざかに含む	外: 回転ナデ 内: ナデ 底: ヘラ切り後ナデ	良
6	土師器 环	通水溝内部掘り下 げ部	復7.6 残2.7	灰白/灰白	0.5mm程度の 砂粒を含む	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	良
7	土師器 皿	導水溝南側周辺部 南壁10層	復20.0 復18.6 2.2	根/にぶい橙	0.5~2.0mm の砂粒を含む	外: ナデ 内: ナデ 底: ヘラナデ	良
8	土師器 甕	調査区一括	復9.6 — 残6.5	赤褐/にぶい橙	0.5~2.0mm の砂粒を多く含む	外: ナデ 内: ナデケズリ	良
9	土師器 甕	調査区一括	復15.0 残4.5	明黄褐/明黄褐	0.5~3.0mm の砂粒を多く含む	外: ナデ 内: ナデ、ケズリ	良
10	土師器 甕	通水溝脇方	復17.6 — 残7.3	灰白/灰白	0.5~2.0mm の砂粒を多く含む	外: ナデ 内: ナデ、ケズリ	良
11	土師器 甕	調査区一括	— 残4.7	浅黄橙/浅黄橙	0.5~2.0mm の砂粒を多く含む	外: ナデ 内: ナデ	良
12	須恵器 环蓋	取水口南側	復11.0 — 1.1	灰/灰	0.5~1.0mm の砂粒を多く含む	外: ナデ 内: ナデ	良
13	須恵器 环蓋	導水溝南側周辺部 南壁10層	復9.8 — 1.6	灰/灰	0.5~1.0mm の砂粒を多く含む	外: ナデ 内: ナデ	良
14	須恵器 甕	導水溝南側周辺部 南壁10層	復18.4 — 残4.3	灰/灰	0.5mm程度の 砂粒を含む	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	良
15	須恵器 甕	導水溝南側周辺部 南壁10層	— 理9.5	褐灰/灰	0.5mm程度の 砂粒を含む	外: 格子目タタキ 内: 同心円文当て具痕	良
16	須恵器 甕	導水溝南側周辺部 一括	— 残5.3	灰/灰	0.5~2.0mm の砂粒を含む	外: 格子目タタキ 内: ナデ	良
17	須恵器 甕	石墨集石中	— 残5.1	灰/灰	0.5mmの砂粒 を含む	外: 格子目タタキ 内: 同心円文当て具痕	良
18	須恵器 甕	導水溝南側周辺部 一括	— 残6.7	灰黄/灰白	0.5~2.0mm の砂粒を多く含む	外: 平行タタキ 内: 平行当て具痕	良
19	須恵器 甕	石墨集石中	— 残6.0	黄橙/黄橙	0.5~1.0mm の砂粒を含む	外: 格子目タタキ 内: 同心円文当て具痕	不良

※復 優元径、残・残存高

第2表 遺物観察表(瓦)

図版番号	種別 器種	出土地点	法量 [cm] (長さ、幅、厚み)	色調 (外/内)	胎土	調整	焼成
20	平瓦	通水溝周辺部	残22.7 残14.3 2.6	浅黄/浅黄	0.5mm程度の 砂粒を含む	凸: ヘラケズリ、ナデ 凹: 布目痕、横骨痕、 系切り痕 側端部: ヘラケズリ	良
21	丸瓦	導水溝南側周辺部 盛土状遺構	残15.8 残10.8 2.2	にぶい黄橙/ にぶい橙	黒色粒、赤 色粒を多く含む	凸: ナデ、ヘラ先痕 凹: 布目痕、分割界線 側端部: ヘラケズリ	良

※残・残存高

## 第4章 総括

今回実施した鞠智城跡第32次調査は、平成16・17年度に実施した池ノ尾門跡における第26・27次調査の再調査である。第26・27次調査においては、石壙、通水溝、導水溝の検出など池ノ尾門跡の構造解明に大きな成果をあげた。今回の調査は、前回の調査で未解明であった石壙背面の延長ライン、導水溝南側周辺部の構造、通水溝の内部構造、排水口の構造等の確認を目的として調査を実施した。

### 遺構について

今回の調査においては、新たに石壙背面の石積み、池状落ち込み遺構、盛土状遺構、通水溝の底部を検出した。

石壙背面の石積みは、前回調査で確認された石壙背面中央部の基底石列の南西側で検出されたもので、4～6段分の石積みが残存していた。30～60cm大の比較的小ぶりな石材を使用して空石積みとしており、横目地を意識した積み方となっている。石材と石材の間際に小さな石を入れ込むなど、全体的に若干粗い印象を受ける。これは、この石積みが石壙の前面ではなく背面に築かれたものであり、視覚効果がそれほど意識されなかっことによるものと考える。鞠智城跡では、城内の東側で「三段の石垣」、「馬こかしの石垣」と呼ばれる石垣が存在するが、これらは築造の時期が明確でなく、今回検出された池ノ尾門跡の石積みは鞠智城の時代の明確な石積みとして貴重な成果であるといえる。

また、この石壙をはじめとして、池ノ尾門跡の通水溝や導水溝などの構築には花崗岩と安山岩系の石材が使用されている。これらの石材は池ノ尾門跡周辺に転石として分布する石材であり、最も入手が容易な石材を使用しているといえる。なお、池ノ尾門跡に散在する軽石は石壙等の遺構の構築に用いられたものではなく、鞠智城内に広く分布する火碎流堆積物に由来するものである。

池状落ち込み遺構と盛土状遺構は、導水溝の南側周辺部から検出された。池状落ち込み遺構は深さ約80cmをはかり、下層に水成粘土が堆積していたため、ある時期に水の滞留があったことがわかる。この池状落ち込み遺構は約11m分を検出したが、その延長は南東方向の未調査区へと広がる。盛土状遺構は、池状落ち込み遺構の前面（城外側）に存在し、その内部は褐灰色粘質土とぶい黄橙色砂質土が交互に積まれていることが確認できるため、版築の技法を用いながら構築されたものと考えられる。盛土状遺構の中からは2列の列石が確認されているが、西側土壙線や南側土壙線における版築盛土中でも同様の石列が検出されており、共通性がみられる。この盛土状遺構は、あたかも池状落ち込み遺構の中に貯まつた水を堰き止めるかのように間連性をもって存在することから、池状落ち込み遺構と盛土状遺構は一体的に構築されたものであったと考えられる。また、盛土状遺構の内部から丸瓦片が出土していることから、池ノ尾門及び石壙などの付属施設が7世紀後半の鞠智城の築造当初から築かれていたとする、それよりも遅れる時期にこれらの遺構が構築された可能性がある。その機能としては、大雨の際など、導水溝と通水溝で水を処理しきれず、周りにオーバーフローしてしまう水を石壙へ流れ込まないように堰き止め、貯めるといった機能をもっていた可能性も考えられる。

通水溝の内部構造の確認においては、底石と考えられる石材を検出し、通水溝における内部構造の一部が明らかとなった。また、底石を検出した地点と取水口部の高低差から導きだすと、この通水溝の傾斜角はわずか約2.4度であり、かなり緩やかな勾配であったことが確認できた。また、通水溝の側壁については、地点によって積み方が異なる状況が明らかとなった。

### 遺物について

池ノ尾門跡は、城門跡という性格上、遺物の出土は少ない。今回の調査においては、須恵器、土師器、瓦が出土した。出土遺物は破片のものが多く、また摩耗を受けているものも多いため、城内から流れ込み、池ノ尾門跡で埋没した遺物も多数あるものと考えられる。その中で、取水口内部から出土した土師器の壊は一部が欠損しているものの、完形に近い土器である。これは、取水口端から通水溝の内部に約30cm入った地点で出土した。丸みを帯びる体部から頭部でくびれて外反し、短い口縁部がつく特徴的な形態をもち、精選された胎土を用いて、かなり丁寧に製作されている。鞠智城跡のこれまでの発掘調査では同様の形態をもつ土器は出土しておらず、肥後地域においても類例がほとんどみられないものである。土器内部にロクロで成形した痕跡が残っていることから8世紀後半のものと考えられるが、類例がないため明確ではない。この壊は、通水溝の底部より約10cm浮いた箇所から、底部を上にした状態で出土していることから、おそらく導水溝から流れ込んで通水溝の内部で詰まってそのまま埋没したものと考えられる。そのように考えるならば、8世紀後半あるいはそれから大きく前後しない時期には通水溝の排水機能が低下あるいは停止していたことが想定される。

また、導水溝南側周辺部の盛土状遺構内部から出土した丸瓦は、時期が明確ではないものの、鞠智城跡の建物に使用された瓦であった可能性は高い。そのように考えるならば、盛土状遺構は鞠智城の築城当初から存在したのではなく、築城とは時期差をもって築造された可能性が高いといえる。

### 池ノ尾門跡の構造について

池ノ尾門跡では、門と石垣、通水溝、導水溝等の施設が一体となって一つの防御施設を作り出している。石垣は、幅9.6mの幅をもち、池ノ尾門跡が所在する幅約20mの谷部をふさぐように構築されている。今回石垣背面の南西部において高さ約1.2mの石積みを検出したことから、基底石の高低差から考えると最も低い中央部においても少なくとも高さ1.35m以上の石積みが存在したといえる。それより上方がどのような構造となっていたかは不明であるが、周辺に散在している石材の数量から考えると、さらに石積みは高かつたものと推定される。また、この石垣は全体的に西側に向かうにつれてカーブしており、石垣東側の状況が明らかではないものの、平面形は谷に対して直線的ではなく、やや城内側にふくらみをもつ形態をなしていたものと考えられる。これは、城内から大水や土石流などが発生した場合、石垣にかかる力を最小限に抑える意図があったものと考える。

石垣の下部には通水溝が設置され、城内から城外への排水を行っていた。全長は約16mで、排水口は石垣前面付近につくものと考えられるが、取水口は石垣背面より約7.5m城内側に入った部分に存在する。取水口を石垣背面付近につくらず、そこから約7.5m内側に入った部分につくられた理由については明確ではない。通水溝の内法は取水口部において幅・高さともに約70cmであり、底石と側壁と天井石からなる構造をもつ。

通水溝の城内側には、通水溝へ水を導くための幅約0.7~1.2m、深さ約40cmの開渠状の導水溝が存在する。導水溝の延長は南東方向の未調査区へと続くが、その先は現地形でも周りを尾根に囲まれた盆地状の地形を呈している。そのため、池ノ尾門跡の東側には貯水池等の池が存在した可能性もあるが、これまで調査が実施されていないため、あくまで推測の域をでるものではない。

また、今回の調査において、導水溝の南側周辺部において池状の落ち込み遺構とその前面に盛土状遺構を検出した。盛土状遺構は、池状落ち込み遺構に貯まつた水が石垣へ流れ込まないために築造されたものと考えられるが、その築造時期については盛土状遺構の内部から丸瓦が出土したことから、鞠智城の築城時期より遅れる可能性が考えられる。

また、池ノ尾門跡における門の原位置については、これまで調査を実施した範囲からは門跡の痕跡は確認できていないことから、現在、市道下本分・堀切線が通る谷部の北側斜面裾に存在する可能性が最も高い。

これらの池ノ尾門跡における各遺構は、城門が城の防衛において重要な機能を果たす点から考えても、7世紀後半に位置づけられる鞠智城の築城当初に構築されたことは間違いないであろう。しかし、池ノ尾門跡は地形的に水が集中しやすいところであるため、構築後に維持・管理の作業や修築が繰り返し行われたことは十分推定される。特に、導水溝や通水溝は城内の排水機能を担う重要な施設であるため、溝さらえなどの定期的な維持・管理の作業が行われていたであろう。そのようななかで、導水溝南側周辺部の池状落ち込み遺構と盛土状遺構が新たに構築された可能性も考えられる。しかし、通水溝の内部から8世紀後半頭のものと考えられる土師器坏が通水溝底部より浮いた状態で出土したことは、その時期には定期的な維持・管理の作業が行われなくなり、池ノ尾門跡における排水機能が低下、もしくは停止したことを示していると考えられる。なお、8世紀後半は鞠智城跡の北側谷部に存在する貯水池において維持・管理の作業が行われなくなり徐々に池が埋没していく時期にあたり、それと軌を一にする現象であると考えられる。なお、石壙が崩壊した時期については、前回調査において石壙部の埋土の中から中世の土師器が出土していることから、中世頃のことであったと推定される。その原因としては、開田等のための人的要因と、土石流などの自然的要因が考えられる。後者については、池ノ尾門跡が水が集中しやすい箇所であるとともに、現在でも周辺部に土石流が発生したと考えられる斜面崩壊の痕跡があることから、過去においても大規模な土石流が発生し、石壙を崩壊させた可能性は高い。

また、鞠智城跡の城門としては、池ノ尾門のほか、深追門、堀切門が存在するが、後二者は急傾斜をもつ地点に門が築造されており、物資の搬入等には向いていないといえる。一方、池ノ尾門は麓の「大門」から緩傾斜で鞠智城内に上がることのできる地点に設けてあることから、鞠智城内への物資の搬入等には主にこの池ノ尾門が使用されたと考えられる。

## 今後の課題

今回の池ノ尾門跡における第32次調査においては、石壙背面における石積みや、導水溝南側周辺部における池状落ち込み遺構、盛土状遺構の検出や通水溝内部構造の確認など、池ノ尾門跡の構造解明に大きな成果があった。しかし、構造の解明とともに、新たな課題も浮かび上がってきたため、最後に今後の課題としてまとめておく。

### ①通水溝排水口の位置、及び石壙前面ラインの確認

今回の調査において、排水口推定部周辺の掘り下げを実施したが、擾乱がひどく、排水口の位置の確認までいたらなかった。排水口の位置を確認することによって通水溝の全長を明らかにできるとともに、未だ確認ができていない石壙前面の延長ラインも明らかにできるものと考える。

### ②石壙内部構造の確認

石壙前面で確認された基底石列の南側（石壙内部）の高まりについては、これまで南側土壙線の尾根から延びる地山であり、石壙は地山の高まりを取り込んで構築されたと認識してきた。しかし、今回の調査において遺構清掃中にその高まりに縞状模様が確認でき、石壙内部が版築の技法を用いて構築されている可能性がてきた。この石壙内部の構造を確認することによって、石壙がどのように構築されたかを明らかにすることができるものと考える。

#### ④導水溝南側周辺部盛土状造構の構造、及び通水溝構築過程の確認

導水溝南側周辺部で確認された盛土状造構の内部をさらに確認することによって、今回検出された盛土状造構内部の石材が列石として続くのかどうかなどを明らかにすることができる。また、通水溝の構築過程を確認することにより、盛土状造構と通水溝の先後関係などを明らかにできるものと考える。

#### ⑤導水溝北側周辺部の構造の確認

今回の調査においては導水溝南側周辺部の構造について明らかにすることができたが、北側周辺部の構造については未だ明らかではない。導水溝北側周辺部の構造を確認することによって、導水溝の機能等をより明らかにできるものと考える。

以上、今回の池ノ尾門跡における調査を終えて浮かび上がってきた今後の課題について述べてきた。

鞠智城跡は国の史跡として保護されている文化財であり、今後さらなる調査を進めていくにあたっては、史跡の保護を前提とした上で慎重に実施する必要がある。

#### （参考・引用文献）

- 熊本県・熊本県教育委員会編 2010 「鞠智城跡の地理的・歴史的環境」『鞠智城東京シンポジウム古代山城鞠智城を考えるⅡ 東アジアの中の古代鞠智城 鞠智城の調査成果』熊本県・熊本県教育委員会  
島津義昭編 1983 「鞠智城跡」熊本県文化財調査報告第59集 熊本県教育委員会  
矢野裕介編 2006 「鞠智城跡－第26・27次調査報告－」熊本県立裝飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館

# 写 真 図 版



池ノ尾門跡遠景(東から)



池ノ尾門跡調査区全景(東から)

図版2



石塁背面石積み(南東から)



池状落ち込み遺構 水成粘土堆積状況(北から)



導水溝・取水口・通水溝(南東から)



取水口内部 土師器坏(第17図-1)出土状況(南東から)

図版 4

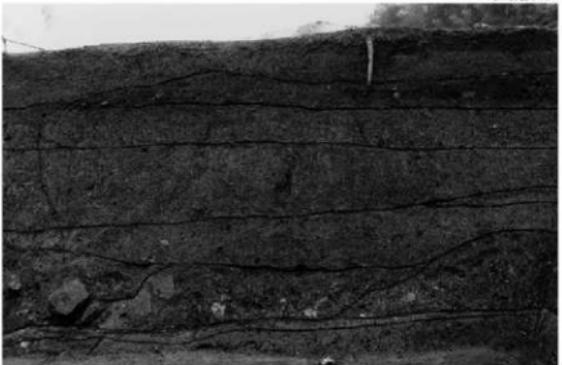


盛土状遺構土層断面(北から)



池ノ尾門跡 門礎石

図版 5



東壁土層断面(北西から)



南壁土層断面(北東から)



ベルト1土層断面  
(南東から)

図版6



ベルト2土層断面  
(南西から)



ベルト3土層断面  
(南東から)



石塀背面石積み(南東から)



石壠背面石積み前面  
土層断面(北東から)



石壠前面基底石列  
(北東から)



石壠背面基底石列  
(北から)

図版8



石基部(南東から)



導水溝1(東から)



導水溝2(北西から)



導水溝北側壁(南西から)



導水溝南側壁(北から)



取水口南側粘土被覆部  
須恵器出土状況 1(南から)

図版10



取水口南側粘土被覆部  
須恵器出土状況2(南から)



池状落ち込み遺構・盛土状  
遺構(東から)



盛土状遺構内石列検出状況1  
(南東から)



盛土状遺構内石列検出状況2  
(南東から)



盛土状遺構内丸瓦出土状況  
(南西から)



導水溝・通水溝(東から)

図版12



通水溝取水口(南東から)



通水溝底部検出状況  
(北西から)



通水溝排水口推定部  
(北から)



通水溝側壁状況（南西から）



通水溝周辺平瓦出土状況  
(西から)



調査区北西部状況（西から）

図版14



調査区全景(北から)



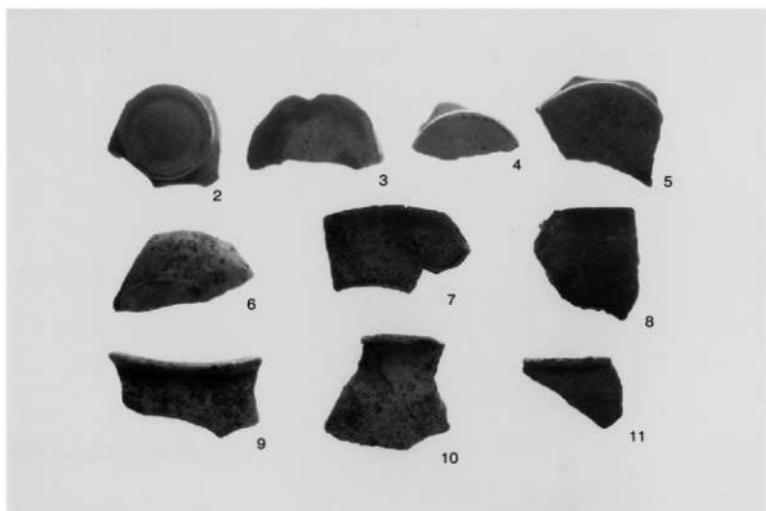
発掘調査作業(南から)



埋め戻し作業(南西から)

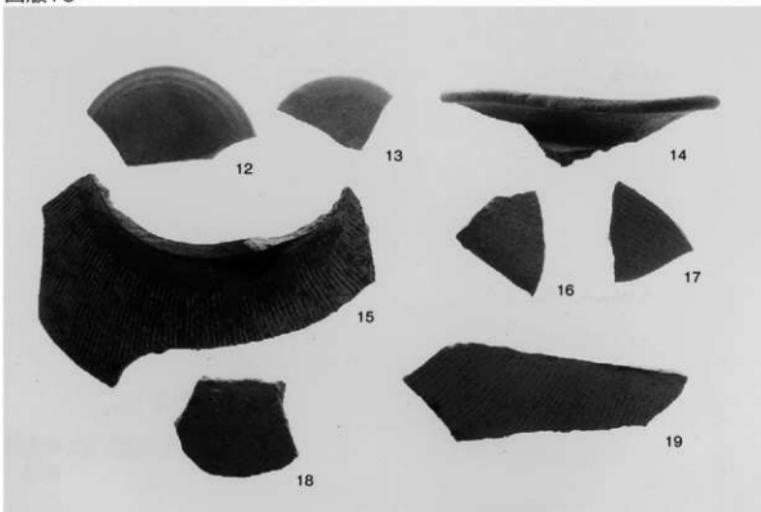


池ノ尾門跡出土土師器环

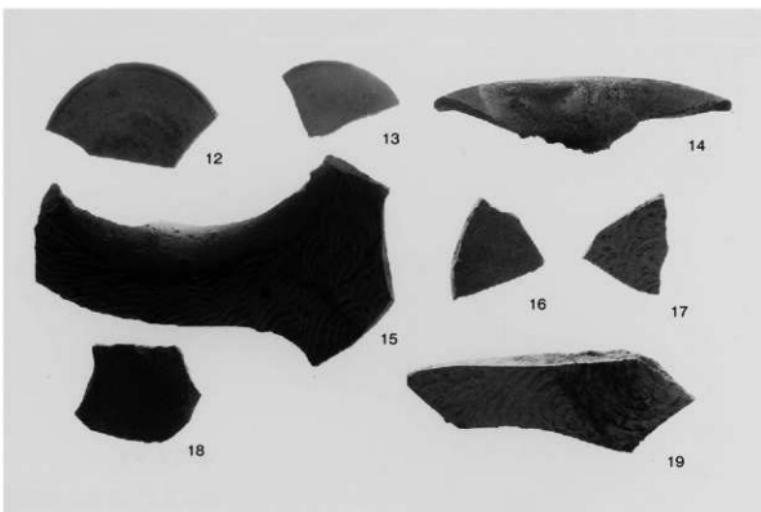


池ノ尾門跡出土土師器

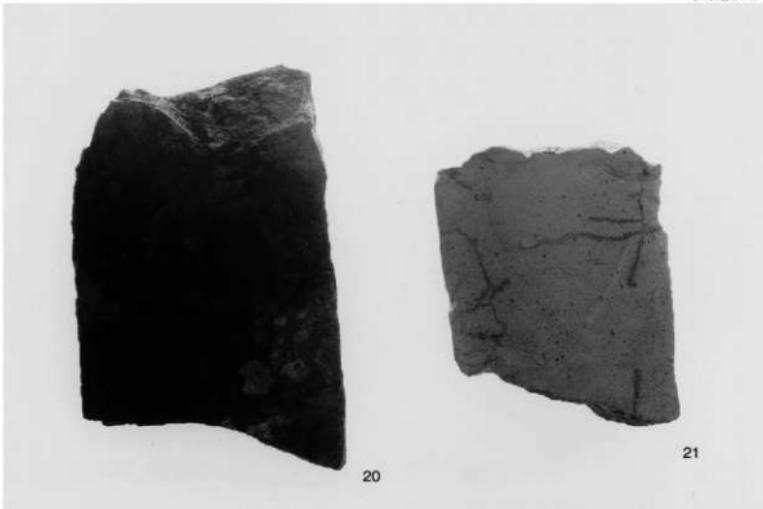
図版16



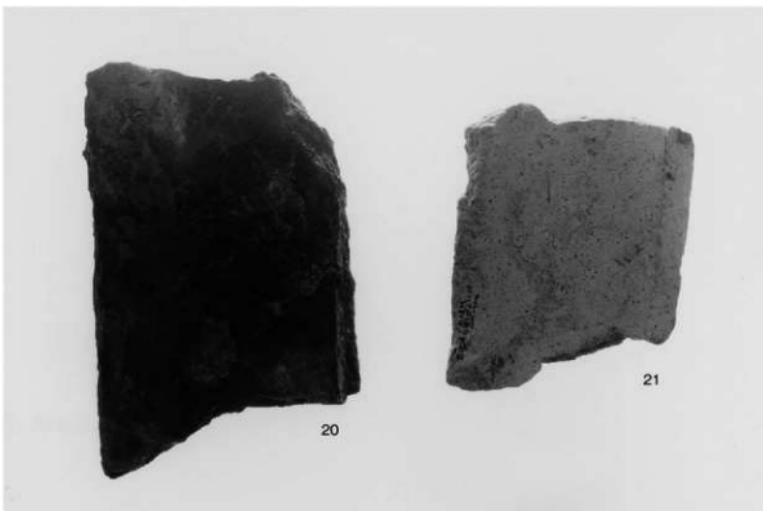
池ノ尾門跡出土須恵器・外面



池ノ尾門跡出土須恵器・内面



池ノ尾門跡出土瓦・凸面



池ノ尾門跡出土瓦・凹面

## 報告書抄録

## 印刷仕様

- ・規 格 A4判
- ・頁 数 66頁
- ・組 版 DTP作成
- ・印 刷 オフセット印刷
- ・製 版 カラー写真：スクリーン線数200線4色刷  
モノクロ写真：スクリーン線数200線1色刷
- ・用 紙 表紙：アート紙220kg  
見返し：上質紙110kg  
国版：コート紙110kg  
本文：上質紙90kg
- ・製 本 無線綴じ

## 鞠智城跡

- 第32次調査報告 -

---

発行年月日 平成23年12月28日  
編集・発行 熊本県立装飾古墳館分館  
歴史公園鞠智城・温故創生館  
〒861-0425  
熊本県山鹿市菊鹿町米原443-1  
TEL 0968-48-3178  
印 刷 口口ニ一印刷  
〒860-0051  
熊本市二本木3丁目12-37  
TEL 096-353-1291

---

発行者：熊本県  
所屬：県立裝飾古墳館  
発行年度：平成 23 年度

この電子書籍は、鞠智城跡 第32次調査報告を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡 第32次調査報告

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2022年6月15日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>